

ソライロノハナ

萩原朔太郎

附やぶちゃん注

「やぶちゃん注…これは萩原朔太郎の自筆手書き私製の自選歌集「ソライロノハナ」の電子化である。本歌集は昭和五三（一九七八）年筑摩書房刊「萩原朔太郎全集」第十五巻で初めて公開されて知られるようになった歌集で、確か、この全集の発刊された前年の昭和五二年に萩原家が新たに発見入手したもので、それまで知られていなかった自筆本自選歌集である（死後四十年、製作時に遡れば実に六〇余年を経ての発見であった）。その存在の可能性は同全集第二巻にある「習作集第八巻（愛憐詩篇ノート）」にある、以下の詩（この決定稿が「ソライロノハナ」の序詩である）によって知られてはいた。

寫真に添へて

歌集「空いろの花」の序に

たはかれどきの薄らあかりと

空いろの花の我れの想ひを

たれ一人知るひともありやしや

廢園の石垣にもたれて

わればかりものを思へば

まだ春あさき草のあはひに

蛇いちごの實の赤く

かくばかり嘆き光る哀しさ

（一九一三、三）

「石垣」はママ。「石垣」の誤記であろう（同三巻では冒頭の「たはかれ」を「かはたれ」、「石垣」を「石垣」とした校訂本文が載り、同第十五巻所収の「ソライロノハナ」の序詩である「空いろの花」の校訂本文も同じである。即ち、「ソライロノハナ」の原本は題名を「空いろの花」としただけで、以下は上記「習作集第八巻（愛憐詩篇ノート）」通りの標記であることを意味している（私は復刻本を所持しているはずなのだが見当たらないので全集記載からかく記した）。なお、同初出形の後の注記（三七五頁）には底本同ノート『巻末の目次では「空色の花の序に」との題名を附している』とある。

本歌集自序には『一九一三、四』のクレジットがあり、大正二（一九一三）年四月頃、

朔太郎満二十七歳の時に製作された歌集と考えられている（この直前の同年二月の末か三月初めには前橋に帰郷しており、本歌集の製作は前橋の実家でなされたと考えてよい）。序詩と自序に、「自敘傳」と題する散文・短歌を配した歌物語風の「二月の海」・歌集群「若きウエルテルの煩ひ」「午後」「何處へ行く」「うすら日」の本文六章からなる。底本解題によれば収録短歌数は全四二三首、内、同歌集内で二首が重複し、それを除く四二一首の内既発表のものは八五首のみである。上記の一首はこの「ソライロノハナ」のみに載るものである。因みに現代口語詩の金字塔、萩原朔太郎第一詩集「月に吠える」が感情詩社・白日社共刊で自費出版刊行されるのは大正六（一九一七）年二月十五日（発行日）で朔太郎三十二歳、この歌集の四年後のことである。

ここでは昭和五三（一九七八）年筑摩書房刊「萩原朔太郎全集」第十五巻本文下欄にある自筆本原型復刻パートを基本底本として、意味を採ることが出来ない誤字や誤表現については（底本の改訂本文ではなく）の私独自の判断で改めたものを電子化した（改訂本文を一部参考にしたところはあるが、基本、私は下欄原本のみで判断をし、校訂本文はあくまで参考に留めた）。具体的には、誤字や異体字であっても見た目、意味が容易に採れると思われるものは原則、そのまま電子化しているということである。但し、それぞれの箇所での誤字・誤用であることは注で指示してある。ただ、何回かに分けてブログで電子化した関係上、幾つかのパート（例えば「大磯ノ海」と「平塚ノ海」の電子化ではなるべく原本通りとしている）で校訂基準が多少異なる部分があるのはお許し願いたい。踊り字「へ」「へ」は全般に互って正字化した。なお、字のポイントの大きさはほぼ底本に準じた。

なお何故、改訂本文を底本としないかという点、筑摩書房全集版は非常に優れた全集ではあるが、その本文は一部には看過出来ない『改訂』ならぬ『改変』と呼ぶべき、編者による勝手な『矯正操作』が行われていると私は強く感じているからである。それについては多くの箇所『改訂』本文との違いを注で指示し、読者の判断に任せることとした（理想的には原本に当たるべきで、実は先に述べた通り、私は復刻本を所持しているはずなのだが、残念なことにサイト版作成という今になっても発見出来ないでお許し願いたい）。

一部に注を附したが、先行する相似・相同歌などの情報は底本の注記を大いに活用させて戴いた。前に編集批判を書いたが、ここで深く謝意を表しておく。なお、本「ソライロノハナ」の大部分及びここで私が相似・相同歌とした萩原朔太郎の短歌は既に私の[ブログ](#)・[カテゴリ](#)「萩原朔太郎」で総て電子化してある。相似・相同歌を含む各投稿短歌の初出電子テキスト等はそちらを参照されたい。

なお、私のPDFソフトの限界から一部の正字及びそれを含んだ文字列が横転する。また、「廻」の正字はPDFでは空欄になってしまっているので、止むを得ず、新字で表記してある。

御了承願いたい。【二〇一四年十二月四日 藪野直史】

ソライロノハナ

1913.

「やぶちゃん注…表紙。「ソライロノハナ」は原本では右書。底本グラビアに載る「自筆歌集『ソライロノハナ』 表紙」というキャプションを持つ画像を視認した。「1913」年は大正二年。冒頭注で述べた通り、本歌集は同年四月頃に製作されたものと推定されている（後の序詩「空いろの花」のクレジット参照）。」

この歌集を編むに當り
て友人倉田健次氏
専ら表装その他の
勞をとられたることを
深く感謝す

「やぶちゃん注…表紙裏の献辞。原本では中央寄せ。「倉田健次」朔太郎が主催したマンドリンクラブのメンバー。後に神奈川県藤沢市鶴沼に住み、朔太郎と同じ群馬を代表する詩人高橋元吉の縁者でもあったことが「[鶴沼に住じた著名人（物故者）動静一覧](#)」の「高橋元吉」の記載から分かった。」

空いろの花

たはかれどきの薄らあかりと
空いろの花のわれの想ひを
たれ一人知るひともありやなしや
廢園の石垣にもたれて
わればかりものを思へば
まだ春あさき草のあはひに
蛇いちごの實の赤く
かくばかり嘆き光る哀しさ

一九一三、三

「やぶちゃん注：底本グラビアに載る『ソライロノハナ』製作覺書と序詩「空いろの花」
というキャプションを持つ画像によれば、本詩はページ下半分に書かれており（表題とク
レジット位置はこの画像に従った）、上部には以下の、大きな青焼風の色彩の、田舎の丘の
上の農園（？）へ登る坂道で左側に少し見える玉石垣に背を持たせて座り込んでいる帽子
とマント姿の朔太郎というモノクローム写真が配されている。」

年ごろ詠み捨てたる歌

凡そ一千首の中より忘れ難き

節あるもの思ひ出多きものゝ

み集めて此の集を編み

あげつ、

悲しき日、樂しき日、

あるかなきかの空いろの花

のためいきばかり、こゝら

へてせんかたなきはあらぢ

かし

「やぶちゃん注：「あらぢかし」はママ。「ソライロノハナ」の自序。序詩「空いろの花」の裏に記されてある。字配は底本グラビアに載る『ソライロノハナ』自序と扉」というキャプションを持つ画像に拠った。底本『校訂』本文では「あらじ」と訂するのは勿論であるが、四箇所読点を総て誤用若しくは不適切使用として除去している。こんなことが『正しい校訂』として許されるとは私には到底思われないのである。

なお、参照した同画像では次の扉の自序の右上には実をつけた植物（木？）と思われるデザイン画が入っている。」

自叙傳

一四二二、四

「やぶちゃん注」以下、「自叙傳」及び「二つの海」本文では、必要に応じて各改行後に私の注をポイント落ち三字下げで附してある。但し、頻繁に見られる歴史的仮名遣の誤りや句読点の脱落、文脈から誤字と容易に分かるもの（例えば「腦」（「惱」の誤字）などの瑣末な点は、読むに困難を要しない限りは原則として注していない。それでも本文がそれらの注によって読み難くなっているのは御寛恕願いたい。」

私の春のめざめは十四才の春であつた。戀といふものを初めて知つたのもその年の冬であつた、

「やぶちゃん注」：「十四才」数えであるから明治三二（一八九八）年。底本年譜にはこの年の記載が全くない。」

若きウエルテルのわづらひはその時から初まる、十五才の時には古今集の戀歌をよんで人知れず涙をこぼす様になつた。その頃從兄の榮次氏によつて所謂新派の歌なるものの作法を教へられた。鳳晶子の歌オホトリアキに接してから私は全で熱に犯される人になつてしまつた。

十六歳の春、私は初めて歌といふものを自分で作つて見た。此の集の第一頁に出て居る二首がその處女作である。

「やぶちゃん注」：「眞」は「頁」の誤字。「鳳晶子の歌」は無論、この明治三四（一九〇一）年八月十五日に東京新詩社と伊藤文友館の共版で発表された「みだれ髪」である。」

此の時から若きウエルテルの煩ひは作歌によつて慰さめられるやうに成つた

然し又歌そのものが私の生命のオーソリチイであつたも知れない、何となれば私は藝術と實生活とを一致させる爲にどれだけ苦心したか分らないのである

「やぶちゃん注」：「あつたも知れない」は「あつたかも知れない」の脱字。」

とうとう私の生活が藝術を要求するのでなく藝術が私の生活を支配して行く様になつて仕舞つた。春のめざめ時代の少年にとつてこれ程痛ましい事はない

私は朝から晩までミューズやアポロの聖堂を巡拜するために漂泊して歩かなければならなかつた。

かういふ旅が長い長い間つゞいた

※と疲れて私は幾度も幾度も倒れそうになつた。

「やぶちゃん注」：「※」「飼」「司」「尻」。「飢」か「餓」の誤字である。改訂本文は「飢」と『改訂』

するが「餓」の可能性も捨てきれず（寧ろ、「牙」は「几」よりも「我」に近い）、断定は出来ない。」

然し信心深い巡禮は決してこの煩はしい旅から歸ることをしなかつた戀と情慾と、それからロマンチックの藝術に對する熱愛とすべて其等のものが若きウエルテルの煩ひの原因であつた。

然しそういふ純美な憧憬の影に、臆病未練な自己慊忌とか厭生とかいふ様な暗い心の芽生がひそんで居ることをさへ見出さずに終つたら、私は本當に美しいチレットタントに成つてしまふことが出来たかも知れない。

次第に私は死とか生とか言ふことを眞劍になつて考へるやうに成つて來た。

丁度靄がはれて行くやうに段段と私の心からロマンチックの幻影が消えて行つた

そして到々本物の世界……醜い怖ろしいあるものが薄氣味悪く笑ひながら私の前に跳出した。

もう斯うなつては、あの神聖なウエルテルのわづらひも晝間のばけもののやうにおどけた者としか見られなくなつてしまつた

若きウエルテルは葦の花束を捧げた手で火酒の盃をあげるやうになつた

藤村や泣菫の詩集を抱いた胸で淫らな女を抱きしめた、

彼は戀よりも肉を慾した

ミュージズやヴィナスの巡禮をやめてバツカスが祠の前に頹唐した官能をふるはして惡の讚美歌を口にするやうになつた。

一しきり私は埒にまみれた場末の居酒屋の繩紺簾を毎晩のやうにくぐつた、

「やぶちちゃん注：「埃」は「埃」の、「紺簾」は「暖簾」の誤字。」

ほのぐらい軒燈の下に心細い三味線の音じめを聴きながら耽溺の幾夜を過したことも珍らしくなかつた

ある時はまた怪しげなレストランの窓にもたれてたはかれ時のうすらあかりと自分の宿世をしみしみと淋しものに思ひ比べて見ることもあつた、そういふ時不覺の涙はつめたい盃の中に落ちて漂つた。

「やぶちちゃん注：「淋しもの」は「淋しいもの」の脱字であろう。」

例の淺草へは毎日のやうに行つた

活動寫眞の人混みの中で知らない女に手を握られることが私の ADVENTURE を欲する心を満足せられた

「やぶちちゃん注：「こ」はレ点である。誤記を綺麗に訂したものである。無論、校訂本文は「させた」となつてし

まひつゝる。」

毒々しい繪着板のペンキの匂ひに唆られて※稚なローマンズの世界に憧憬する、可憐な不良少年の幾人かはその邊の支那料理店で毎夜のように私と顔を合せた、

「やぶちちゃん注：「※」＝「糸」＋「刀」。「幼」の誤字。「繪着板」は「繪看板」の誤字。」

述路のやうなあゝの東洋のモルンマントルをほつき歩くことも花瓦斯の光眩ゆい大門をくぐることも、最早私にとつて何等の意義をもなさない程その頃の神経は荒廢し切つて居た

「やぶちちゃん注：「述路」は「迷路」の誤字。「モンマントル」はママ。「。」

そんな時例の吾妻橋側の酒場で芳烈な電氣ブランを飲むことを決して忘れなかつた。斯うして私は刺激から刺激を求め歩いた

歡樂の後に歡樂を追ふて止まなかつた、でなければ實際私には生きて居ることが出来なかつたのである。

けれども歡樂を追求するといふ事は實際には苦痛を求めるといふことである

刺激を漁るのはつまり憂愁と死に向つて突貫する様な者である

聽て私の心のどん底に今まで曾て知らなかつた苦い苦い哀傷と空虚といふ薄氣味の悪い蟲けらがその巢を張りつめて居た事を發見したときに私は何事にも興味を失ふ人と成らなければならなかつた。

私は空^{カラ}の盃を充たすあるものを求めやうとして無益に狂ひ廻つて居たことを知つた時に遂に泣くことも出来ない人になつて居た。

そして痛々しい程デリケートになつた官能のコイルばかりが晝は晝もす夜は夜びてえ高麗鼠のやうに、せはしなく神経の織線をめぐりめぐつて突いて居た

「やぶちゃん注：「神経の織線」校訂本文では「神経の纖維」とする。「纖維」の校訂には微妙に留保をしたい。「夜びてえ」校訂本文では「夜びとい」とする。採らない。これが許される校訂ならば、私は寧ろ「夜びいて」と訂する。」

何人に向つて訴へる由もなき此の苦惱、何物を以てしても慰める事の出来ない此の哀傷、かういふいらいらした心のありさまを私は詩や歌に作つて自ら低唄して居る外に方法は無かつた。

「やぶちゃん注：「低唄」校訂本文では「低唱」とする。」
かうした類唐と憂愁のやる瀬ない日が長い間つづいた。

「何處へ行く」一篇はすべて此等の日の痛ましき記念である、歡樂の燈影に光る玉虫のころと憂愁の闇路にほふ螢の青きためいきである。

そうして「午後」は「若きウエルテルの煩ひ」が最後の幕と「何處へ行く」序幕との間に奏さるべき INTERMEZZO である、

すなほなる心のうつりかはりはそのテーマを通してすべてのリズムにまでくつきりとあらはれて居ると思ふ

さはさりながら名もなき墨色の花にも似たる私の淋しい生の悲劇はそのカラストロヒイの黒き幕が下るまでにまだ暫らくの間がある。最近の「うすら日」はいはゞ年増女の顔に残つた粉おしろいの微かなにほひである。きちがひの惡落付とやんまとんぼの眼玉である。

「やぶちゃん注：「惡落付」「わるおちつき」と読む。惡落着とも書き、必要以上に落ち着きはらうこと。まったく動じないこと。この行、続いているのかも知れないが、底本初出も校訂本文も判然としない。改行とつた。」

若し節をつけて唱ってくれる人があるならば低い投げやりの調子であの寂しいあきらめのモットオをにははしてもらひたい。

空いろの花

■ ■


「やぶちゃん補注…前半「十六歳の春、私は初めて歌といふものを自分で作つて見た。此の集の第一頁に出て居る二首がその處女作である」とあるのは「ソライロノハナ」に、この「自叙傳」の後、「二月の海」の歌物語を挟んだ最初の歌集パートである「若きウエルテルの煩ひ」の冒頭にある以下の二首を指すか。

柴の戸に君を訪ひたるその夜より

戀しくなりぬ北斗七星

春ここにここに暫しの花の酔に

まどろむ蝶の夢あやぶみぬ

ほかにはしつくりくるものが見当たらない。誤っている場合は御教授を願いたい。なお、現在知られる最も古い朔太郎の短歌は、前橋中学校（現在の県立前橋高等学校）の校友会

誌『坂東太郎』第二十一巻第四号（明治三五（一九〇二）年十月発行）に服部躬治むつはら選で掲載された、底本の筑摩書房版全集第三巻の「短歌」の冒頭に載る、

鞆たもとのさゆらぎ止まぬ我が庭の芭蕉卷葉に細し春雨

とされる。当時、朔太郎、未だ満十五歳であった。」

二月の海

一九一一、二

愚ろかなる叛逆心と、耐え難い孤獨の寂寥と自殺的の腦鬱と、忌はしい情慾の刺激と失意と煩悶と總てさういふ混亂こんがらかつた心の壓迫が私を海の方へと導いた。

大磯よ汽車にのりたくなりたれば
海が戀しくなりたればきぬ

冬の磯邊には靜寂の境趣が漂ふて居た。
力のない午後の日光を浴びながら漁師の家族はそここゝに投網を編んで居た。病人らしい都の人が物憂げに遠い濱邊を歩いて居るのも淋しく思はれた

氷りたる二月の海の潮鳴を
泣きて聽かんと來しにあらねど

怖れつつ都をのがれ海に來て
潮鳴る音に心悲しむ

疲れたる漂泊者のする様に私は例の砂山に寝ころんで海を眺めた、
空はよく晴れ渡つて生ぬるい砂は擦るやうに私の掌の中から指の間をすべり落ちた、

死ぬること思ふ哀しさ生くること
思ふさびしさ海に來て泣く

海の音きくつゝ砂に寝ころびて
空を見て居れば泣きたくなりぬ

海には帆を張つた漁船も二つ三つならずはしつて居た
あはれその蒼々たるわだつみの色よ

砂山にまろびて我が思ふこと
知れば驪も哀しみて鳴く

砂丘をつたはつて小磯へ行つた

砂原の枯れ艸の上をわが行けば
虫力なく足もとに飛ぶ

「やぶぢやん注…この一首は、朔太郎満二十四歳の時、『スバル』第三年第四号（明治四四（一九〇三）年四月発
行）の「歌」欄「その四」に「萩原咲二」名義で掲載された五首の内の一首、

砂山の枯草の上を我が行けば蟲力なく足下に飛ぶ

類型歌である。」

音もなく影もない小磯の濱には干からびた筆草ばかりが昔ながらに生へて居た。私はその
赫土の上に身を投げて稚子のやうに聲をあげて啜り泣いた
いつのまにかたそがれ時のうすら寒い潮風が涙にぬれた私の盞を吹いて居た

小磯なるかの砂山に忘れしは
草も蝻るべきつめたき涙

如何ならん小磯が濱の筆くさは
根を絶えぐさと思はざりしを

五年まへの夏、希望に輝やく瞳を以て此處の松林の中から大洋の壯嚴を祝した紅顔の少年
は頽唐の骸骨となつて長い漂泊の旅から歸つて來た。今見る海の色にもまして青ざめたる
その顔色よ。

きのふまで少女の群とバルコンに
歌をうたひし我ならなくに

いとせのむかし女を戀したりき
その頃のことすべて美しくし

海ちかき濤龍館のおぼばしに
立つは月の出待つに似たれど

不孝なる繼子の如く世を怖れ

かつは怨みて仇をたくらむ

さびれきつた冬の海水浴町にも流石に夜の灯は紅くにほつた

ところの流行唄を弾くとき何故か悲しい眼附をして私にあることを訴へたのである

かの少女唄をうたへば悲しめる

我も冷えたる盃をあぐ

うれひつゝある少年と知るよしも

なければ彼はいそしみて弾く

少年の心をそゝる仇言も

たゞに悲しみ空耳にきく

美しき言葉すくなの少年よ

かく言ひかれは嫺めきてきぬ

海に来て泣きてかへらん我ぞとは

いかで知るらん昨夜の少女は

美しき海の少女と寝し故に

潮の香あびしにほひこそすれ

されど飽和したやうな重い心の沈滞を海へ来て釋かうとしたのは愚かであつた

翌る朝、私は漂然として其處を立つた。どこまでも静をいとふて動を愛する私は生れながらに漂泊の運命をもつて居るのではあるまいか、

それは兎も角、此の氷れる冬の海に来て悲しむよりは、熱鬧の巷の中に耽溺の痛ましい快樂を貪つて居る方が、まだしも幸福といふものであるう、

一夜にして私は大磯の海に告別した

そのかみの虎が涙も悲しめる
この少年を濡すよしなし

(大磯ノ海、完)

「やぶちゃん注：概ね自筆本そのままとし、「耐え」「脳鬱」「そういふ」「生へて」「輝やく」「大洋」「漂然」といふものである」といった文脈からあまり違和感なく読めてしまう誤字や句読点及びその有無も多くはママとしたが、この詩にはかなり鑑賞に際して著しい違和感を生ずる誤字や誤用が認められるため、私の判断で次の十一箇所十二点について以下のように変更した（なお、この変更は総て底本の校訂本文でも採用されているものであるから、殊更に独断的な変造とは思っていない）。上が底本で「↓」以下が訂正したものである。

● 禺ろかなる↓愚ろかなる（萩原朔太郎の自筆稿にしばしば見られる誤字である。以下に示す通り、もう一箇所「海へ来て釋かうとしたのは禺かであつた」がある）

● 矢意↓失意

● ※車（「※」＝（へん）「米」＋（つくり）「气」）↓汽車

● そここゝに投網を編んで居た↓そここゝに投網を編んで居た。（句点なしでは極めて読みにくい）

● 干からびた筆草ばかりが昔ながらに生へて居た↓干からびた筆草ばかりが昔ながらに生へて居た。（句点なしでは極めて読みにくい）

● 啗るべき↓枯るべき（「啗」は音「コ・ク」訓「ねずみおとし」で、鼠を捕る仕掛けの謂いであり、枯れる・涸れる（朔太郎はしばしば枯れるの意に「涸れる」を用いる）の謂いはない）

● 寄望↓希望

● 嫋めてきぬ↓嫋めきてきぬ（音数律からも脱字と判断される）

● 海へ来て釋かうとしたのは禺かであつた↓海へ来て釋かうとしたのは愚かであつた

● 翠る朝↓翌る朝

● 貧つて居る↓食つて居る（漢字の誤りとルビの脱字の二箇所）

以下、老婆心ながら語注しておく。

○「擽る」は「くすぐる」と読む。

○「筆草」単子葉植物綱カヤツリグサ目カヤツリグサ科スゲ属コウボウムギ *Carex kobomugi* の和名異名。

○「瀟龍館」底本には『これは「瀟瀧館」の誤記かも知れない』という注があるが、その

根拠（平塚に瀉瀧館という旅館があったというような事実）は示されていない。

○「釋かうとした」は「とかうとした」と読み、「解こう」（散らす・消す）の意である。

○「熱鬧」は「ねつたう（ねつとう）」と読み、人が込みあつて騒がしい、の意である。

なお、作中に出る、

きのふまで少女の群とバルコンに

歌をうたひし我ならなくに

の一種は、本「ソライロノハナ」製作の前年である明治四五（一九一二年）六月二十二日消印萩原栄次宛の葉書に出現する一首と表記違いの相同歌である（以下に示す書簡中の「△」の二番目の短歌）。本作との親和性が非常に濃いので以下にその全文を掲げておく（底本は一九八九年筑摩書房刊の萩原朔太郎全集補巻）。踊り字は正字化した。「神經」はママ。二ヶ所の「ように」及び「ような」もママである。投函地はまさに大磯で、発信署名の部分は、編者注によればはつきりとは読み取り難い（ローマ字部分）としながらも、

大磯ノ海ニテ Kana-iwa Ni-te

とあると底本注データに載る。「Kana-iwa」というのはピンとこないが、因みに、現在の大磯海水浴場のシンボルとして、浜から十メートルほど沖合いに浮かぶ岩礁（周回凡そ二十メートル）があり、これを「かぶと岩」と呼称しているが、これか？ また編者注には、この書簡には付箋がついているとし、そこには、『石川縣加賀江郡山中温泉大嶋屋別荘ニテ萩原栄次 當時右之地ニ居住候ニ付御轉送願候』とある由。朔太郎、満二十五歳。

*

罪人のように、私は都を逃れてこの海に漂泊して来ました、怪しきまでに痛々しい神經の刺激は私に海へ行けと命じました、

はてしない青海原と、夢みるような海潮の響は、どんなに、此の頃の暗愁に閉された心をはればれた愉快の世界へ導いて呉れる事かと、胸を轟かしながら初夏の大磯をたづねました、

あゝ然しそこには只深い沈黙と苦痛の憂色が漂ふて居るばかりでした、

去年の冬、失張同じ思で此處へ逃れて来たときに、不幸にも私が見出した絶望の海は、今日もまた私の前に横つて居るばかりでした、

△浮ね鳥、かなしむ我はこゝに來て海を見れば涙ながるゝ

數年まへ、私は何事をも知らない幸福の日を無邪氣の少女たちと一所に、この二階に送つた事がありました

△きのふまで少女の群と出窓に歌をうたひし我ならなくに

思ひ出の日は何時も發しげに笑み輝き、現實は黒き死の苦痛の影に私をおびやかします、

△わだの原、沖つ潮あひに鳴く鳥のうら淋しげに物をこそ思へ

きのふの夕べ、人氣なき濱邊に出て、心ゆくばかり泣きあかしました、さめざめと稚子のように……

こゝに來て三日、歌も日記もたゞ涙のそればかり、

さらば、

二十二日、

また本作と次に掲げる「平塚ノ海」との関係に関心のある向きには、この部分に就いて久保忠夫氏が「萩原朔太郎歌集『空いろの花』贅注——「大磯ノ海」の少女」〔短歌〕昭和五六（一九八一）年三月）で行った論考を批判する形で書かれた渡辺和靖氏の「[萩原朔太郎](#)——「[愛憐詩篇](#)」から「[浄罪詩篇](#)」へ」（PDFファイル・一九九〇年刊愛知教育大学研究報告三十九所収）の『(4)「二月の海」の少女』を参照されるとよい。』

「やぶちゃん注…ここに底本校訂本文で三行分の行空きがあり、以下、「平塚ノ海」が始まる。この「平塚ノ海」は、恋人エレナを平塚に訪ねたが、既に彼女は一月前に亡くなっていたという歌物語である。

エレナとは朔太郎の妹ワカの友人で本名馬場ナカ（仲子とも 明治二三（一八九〇）年〜大正六（一九一七）年五月五日）。「エレナ」は彼女の後の洗礼名（受洗は大正三（一九一四）年五月十七日）。朔太郎が十六歳の頃に出逢い、十九で恋に落ちた。後、ナカは明治四二（一九〇九）年に高崎市の医師と結婚して二人の子も儲けたが、結核に罹患、転地療養の末に没した。

実にこの自筆自選歌集「ソライロノハナ」を捧げたヒロインその人である。萩原朔太郎が生涯、永遠の聖少女として追い続けることとなるファム・ファータルであった。

取消線は抹消を示す。」

平塚の病院に昔知れる女の友の病むときいて長い松林の小路をたどつて東へ東へと急いだ。海に望む病院のバルコニーに面やつれた黒髪の人と立つてせめて少年の時の追憶を語り合ひたかつたのである。音もない病室のカアテンの影に啜り泣く哀れの少女が思ひがけない昔の友の音づれをきいたとき、どんなにか驚きかつは悦ぶであろうといふ事も私の果敢ない驕樂の幻影であつた

けれども既にそこには待つ人は居なかつたのである、

あはれの人妻は一と月ほどまへ影のやうに此の世から消えてしまつたのである、

私は消然としてふたゝび海の方へさまよひ出た

病院の裏門を出て海岸へ
つゞける路のコスモスの花

平塚の佐々木病院のバルコンに
海を眺めてありし女よ

月光に魚の鱗のひかるとき
窓にもたれて泣く人を見き

平塚の海はあはれにも痛ましいものであつた、
濱邊には誰れ一人さまよふ者もなく、海には一つの帆影も見えない
其處にはただ松籟と濤聲とが何時もの哀歌をうたつて居るばかりであつた
颯の一群が私の前をよぎつて遙か先の波うち際に展開した
數十羽の白い鳥は兵士のする様に散兵線を張つて沖の方へ沖の方へと進んで行く

悲しみて二月の海に來て見れば
浪うち際を犬の歩くける

「やぶちゃん注：この一首は、朔太郎満二十四歳の時、『スバル』第三年第四号（明治四四（一九〇三）年四月発行）の「歌」欄「その四」に「萩原咲二」名義で掲載された五首の内の一首、

悲しみて二月の海に來て見れば浪うち際を犬の歩ける
の標記違いの相同歌である。」

かくばかり悲しき海にたゞ一つ
颯のとぶは耐えがたきかな

其所の海岸の砂山にイスパニヤ形のベンチが置かれてあつた、

あはれ此の寂しい砂汀の上にたつた一個のベンチ、その骨は錆びそのペンキは禿げ落ちて
からそも幾年の間、あんどろめだの様に御前は海ばかり眺め暮らして居たのか、その片隅
に腰かけた時、私は何處からともなく運命の痛ましい訴へを聞いた、

人もなき砂山の上に置かれたる

ベンチは如何にさびしからずや

幾人の肺病患者が来て息みけん
平塚の濱のあはれベンチよ

かのベンチ海を見て居りかのベンチ
日毎悲しき人を待ち居り

「やぶちゃん注…この一首も先の注と同じ、『スバル』第三年第四号（明治四四（一九〇三）年四月発行）の「歌」

欄「その四」に「萩原咲二」名義で掲載された五首の内の一首、

かのベンチ海を見て居りかのベンチ日毎悲しき人待ちて居り

の標記違いの相国歌である。」

「一人ぼつち」元氣のない旅びとは自分の指で砂に書いた文字を見つめながら、ぐつたりと疲れはて、其處に横はつて居た、何時までも、何時までも……

砂山にうちはら這ひて煙草のむ
かつはさびしく海の書きく

急にけたゝましい籟笛の音が眞晝の沈黙を破つてうら侘しいそこらの漁村に響き渡つた、長い長い急行列車は冬枯れの木立の間をかすめるやうにして走り去つた。

私はまた立上つて松林の中をさまよつた、停車場の方へ出る路を急いだのぞたどつて居るのである

海よ、さらば、

都の人は都へかへり、旅人は旅を急がなければならぬ、

何となく泣きたくなりて海へきて
また悲しみて海をのがるゝ

（平塚ノ海、完）

「やぶちゃん注…ほぼ自筆本そのままに電子化した。従つて「悦ぶであろう」「消然」「歩るける」「耐えがたきかな」や句読点及びその有無も多くはママである。但し、次の二箇所については鑑賞に際して著しい違和感を生ずると考え、私の判断で変更した。

・第二文「海に望む病院のバルコニーに面やつれた黒髪の人と立つてせめて少年の時の追憶を語り合ひたかつたのである。」とした末の句点は底本ではない。文意から打つた。底本校訂本文でも同じく句点を打つ。

・「イスパニヤ形のベンチ」は自筆本では「ペンチ」。誤記。底本校訂本文でも同じく「ベンチ」に改められている。」

若きウエルテルの煩ひ

過ぎし日よ

樂しき十六と事多かりし十九の思ひ出よ

心ざま素直にして容姿また美しかりし我が少年の日の

戀ひしさよ

ああ忘れがたきその頃の少女等よ

「やぶちゃん注…「戀ひしさよ」はママ。「若きウエルテルの煩ひ」標題頁の裏に掲げられている序詩。以下、注は本文と同じ高さから同ポイントで示してある。」

柴の戸に君を訪ひたるその夜より

戀しくなりぬ北斗七星

春こゝにこゝに暫しの花の酔に

まどろむ蝶の夢あやぶみぬ

ゑにし細う冷たき砂にたゞ泣きぬ

戀としもなき濱のおぼる月

「やぶちゃん注…「ゑにし」はママ。この一首は、朔太郎満十五歳の時、一ノ宮青松館から出された明治三五（一九〇二）年八月十三日消印萩原栄次宛葉書に載る三首の内の一、えにし細う小き砂にたゞ泣きぬ歌は名になき濱のおぼる月の類型歌であるが、かなり印象が異なる。」

朝ざむを桃により來しそゞろ路

そゞろ逢ふひとみな美しき

「やぶちゃん注…この一首は萩原朔太郎満十六歳の時、『坂東太郎』第三十四号（明治三五（一九〇二）年十二月発行）に掲載された、最初期の短歌五首連作「ひと夜えにし」の三首目、

あけぼのの花により來しそぞろ道そぞろあふ人皆うつくしきの類型歌である。」

忍ひつゝ人と添ひ來し傘の一里
香は連翹の黄と迷ふ雨

「やぶちゃん注…「忍ひつゝ」はママ。下句は「ソライロノハナ」原本では「香は連翹の黄と迷ふ雨」となっているが、これでは如何にも意味も通らず、韻律も悪い。やや躊躇は感じるが底本の誤字判断を支持し、ここは校訂本文の「迷ふ」を採った。」

繪日傘は桃につゞきて清水院の
御堂十二に晝の鐘なる

「やぶちゃん注…「清水院の御堂十二」不詳。識者の御教授を乞う。」

我れ寧ろ煩へもたに悶へ戀に戀ひて
野邊に我が世を笛吹かん願ひ

「やぶちゃん注…「煩へ」「悶へ」は孰れもママ。」

君に逢はず山百合つみて歸りくる
小出松原なくほととぎす

「やぶちゃん注…「小出松原」「純情小曲集」(大正一四(一九二五)年八月新潮社刊)の「郷土望景詩」の私の偏愛する一篇「小出新道」の自註「郷土望景詩の後に」に「小出松原」で出る。「一群の鳥(歌) 萩原朔太郎 短歌十三首 附習作二十首 大正二(一九一三)年八月」の私の注を参照されたい。」

紅棹に山吹流す小歌舟
君が醉歌に眠る春の川

小雨黄に垣木蓮に低うして
忍ぶに人の口疾くちしなる夜や

「やぶちゃん注」：「垣木蓮」は原本では「桓木蓮」。少し迷ったが全集校訂本文を採った。「口疾」は形容詞ク活用の「口疾くちどし」で、返事や返歌の受け答えがす早いこと、または、もの言うさまが軽率だという謂いである。後者の意であろう。」

いさゝかは我と興ぜし歌も見き
いま寂寞にたえぬ野の路

「やぶちゃん注」：「たえぬ」はママ。萩原朔太郎満十六歳の時の、『文庫』第二十三卷第六号（明治三六（一九〇三）年八月発行）に「上毛 萩原美棹」名義で掲載された七首の第四首、

いささかは我れと興ぜし花も見き今寂寞にたえぬ野の道
の標記違いの相同歌である。」

何とてかの人の臆病なる

よれば戸に夢たゆたげの香ひあり
泣きたる人の宵にありきや

「やぶちゃん注」：同じく『文庫』第二十三卷第六号（明治三六（一九〇三）年八月発行）に「上毛 萩原美棹」名義で掲載された七首の第二首、

よれば戸に夢たゆたげの香ひあり泣きたる人の宵にありきや
の標記違いの相同歌である。」

旅にいづる日

母や指をあしたかむなの百合の薫り
今宵枕の月にえたえぬ

「やぶちゃん注」：「たえぬ」はママ。上句は、母が旅に出るその日に、「お前の癖の、朝の寝起きに指を齧むのはいけないよ」と言ってくれた、その百合のような母の薫り、若しくはそれが現にある旅宿の百合の実際の薫りに導かれたという表現だろうか。識者の御教授を乞うものである。」

艶の名をたれや負はせし桃緋桃
ゆうべこの子に情もたぬ雨

「やぶちゃん注」：「ゆうべ」はママ。「桃緋桃」は原本では「桃※桃」（「※」＝「糸」＋「兆」）。

校訂本文を採った。」

雨細う情に春ゆく伏見途
京へ三里の傘おもからぬ

罪許せ臙脂梅花の鬘ふかき

別れなればの一夜の枕

「やぶちゃん注…読みの「ゑんじ」「ゑにし」はママ。」

君にとて投げたる謎のとけもやらで
この春くれぬ悲しからずや

従兄、姉どちと京都に

あそびて

はらからが朝院参西の院

比叡やゝ寒き梅に参うでびと

「やぶちゃん注…原本は「参うでびと」であるが、底本全集校訂本文と同じく衍字と判断

しつつも、校訂本文のように「参でびと」という『補正』を行わず、本文原型を壊さない
ように「まう」のルビを恣意的に省略して示さずに「う」を残した形とした。」

野よりいま生まれける魂幼くて

一人しなれば神もあはれめ

「やぶちゃん注…「幼くて」の「幼」は原本では「※」||「糸」+「刀」であるが、以下の
公開作から誤字と断じて校訂本文と同じく「幼」の字を採った。「おさな」のルビはママ。
朔太郎満十六歳の時の、『明星』卯年第八号・明治三六（一九〇三）年八月号の「無花果」
欄に「萩原美棹」の名義で掲載された五首の巻頭歌、

野より今うまれける魂をさなくて一人しなれば神もあはれめ
と標記違いの相同歌である。」

天地に水ひと流れ舟にして
君とありきとおぼへしや夢

「やぶちゃん注：「おぼへ」はママ。この一首は、朔太郎満十六歳の時の、『文庫』第二十四卷第三号（明治三六（一九〇三）年十月発行）に「上毛 美棹」名義で掲載された九首の五首目、

天地に水ひと流れ舟にして我もありきと忘るべしや夢
の類型歌である。」

董つむと何時しか岡の三里こえて
迷ひ出でぬる桃多き里

「やぶちゃん注：原本では「迷ひ」は「述ひ」。先行例（本「歌群」若きウエルテルの煩ひ」五首目）及び全集校訂本文に従い、訂した。」

名なし小草はかな小草の霜柱
春の名残と踏まむ二人か

「やぶちゃん注：朔太郎満十六歳の時の、『文庫』第二十三卷第六号（明治三六（一九〇三）年八月発行）に「上毛 萩原美棹」名義で掲載された七首の掉尾、
名なし小草はかな小草の霜ばしら春の名残とふまむ人か
の類型歌である。」

み歌さらになつかしみつゝ慕ひつゝ
忘れかねては行く萩が原

「やぶちゃん注：朔太郎満十六歳の時の、『文庫』第二十四卷第三号（明治三六（一九〇三）年十月発行）に「上毛 美棹」名義で掲載された九首の第六首目、
み歌さらになつかしみしたひつゝ忘れかねては行く萩が原
の類型歌である。」

花におちて花に歌えし身は胡蝶
戀のもだえに狂ひぬ倦みぬ

「やぶちゃん注…原本は、

花におちて花に歌えし身は胡蝶
戀のもたひに狂ひぬ倦みぬ

全集校訂本文は、

花におちて花に歌へし身は胡蝶
戀のもだえに狂ひぬ倦みぬ

である。「もたひ」の部分のみ、意味が通らぬので校訂本文を採った。」

美しう君よそほへて船にのせて
港いづべき戀もあらぢか

「やぶちゃん注…「よそほへて」「あらぢか」は孰れもママ。底本の注には校訂本文でも「よそほへて」を維持し乍ら（他では歴史的仮名遣や誤字に対して鮮やかに文句なし注なしの確信犯の『補正』を英断しているにも拘わらず）、『「よそほへて」は「よそはせて」の意の誤用と思われる』という注を附すに留めている。」

くちなはの瞳おかしや世にはぢて
狐の如く野に迷ふわれ

「やぶちゃん注…「おかしや」はママ。原本では「迷ふ」は「述ふ」であるが、先行する誤字と校訂本文から訂した。」

かくて尚千代もあるべし世は小さう
君が胸にといたつけ白鳩



「やぶちゃん注…「いたつけ」は他動詞タ行下二段活用の古語「射立^いつ^た」を「射た立^いつ^たく」というカ行五段活用に誤って変化させたその命令形か。——射た矢が突き立つように君の胸へと飛び込んでゆけ、白鳩よ——大方の御批判を俟つ。」

くらやみに動くものあり日は知らで
いたちむぐらの眞洞に似る世

「やぶちゃん注：朔太郎満十七歳の時の、『文庫』第二十四卷第六号・明治三六（一九〇三）年十二月に「上毛 萩原美穂」の名義で掲載された十四首連作の掉尾、
くらやみに動くものあり。日はしらで、いたち、もぐらのようによべる如く。

の類型歌であるが、下句のイメージは聴覚的な唸り声から視覚的なブラック・ホールの冥界へと変じて全く異なっている。「呻吟によべる」という分かり難い古語とイメージの衝突の分かり難さは解消されたものの、「世」という上位構造の比喩が明らかにされてしまい、分かりが良過ぎる優等生短歌になってしまった感がある。句読点を配した独特のリズム感覚からも先行（と考えてよい）句形を私は支持する。」

別れても人待つほどはかへり来よ
岩にせかるゝ瀧川ならぬ

なべて世は美しくしなべてけがらはし
解しえぬものと死は迫るかな

「やぶちゃん注：「美しく」はママ。」

時事を憤りて

ますらをはたゝず小麦は穂に笑めど
哥薩克コサックかへらず秋やゝたけぬ

「やぶちゃん注：「穂」は原本では「※」（＝「禾」＋「耨」）であるが、文脈から訂した。校訂本文も「穂」とする。「哥薩克コサック」かつてウクライナと南ロシアなどに生活していた軍事的共同体であったコサック（КОСАК）。本「ソライロノハナ」の製作は大正二（一九一三）年四月頃で、この歌自体の「時事を憤りて」とは、ロシア帝国の革命派に対する容赦ない弾圧やロシア帝国の第一次世界大戦参戦（一九一四年）への軍靴の音を指すものか。なお、コサック軍は同大戦ではロシア騎兵団の中心を成した。後のことながら、しかしこの後の一九一七（大正六年）年のロシア革命が勃発するとウクライナ・ドン・クバーニに於いてコサック三国は独立を宣言、三国はロシア白軍及びシベリアのコサック諸軍とともにロ

シア共産党及び赤軍に抵抗したが敗北、一九一八年から一九二〇年にかけてコサック階級は排除されてコサック諸軍も廃軍となった。なおこの後、裕福なコサックの一部は欧米諸国へ逃亡したが、残されたコサックは共産党による弾圧の対象となり、ソヴィエト政権はコサックの大部分とそれらの家族全員を死刑や流刑に処し、ホロドモール (Holodomor) …一九三二年から一九三三年にかけてソビエト連邦ウクライナ社会主義ソビエト共和国・カザフスタン共和国・現ロシア連邦のクバーニ・ヴォルガ川沿岸地域・南ウラル・北シベリアなどのウクライナ人が住んでいた各地域で起こされた人工的な大飢饉。ウクライナ人たちは強制移住によって家畜や農地を奪われて、このジェノサイドによって四百万から千四百五十万人が死亡したとされる。この大飢饉は現在、ウクライナ議会によってスターリンによる計画的な飢餓と認定されている) によって餓死させられた。このため、第二次世界大戦においてはコサック残党はドイツ軍に味方してソ連軍と戦ったが、ドイツの敗北とともにコサックは共同体としての姿を消した(ここは主にウイキの「コサック」及び「ホロドモール」に拠った。これ以前のコサック関連の情報を私は不勉強にしてよく知らない。ここで朔太郎が憤ったコサックに関わる時事とは何だったのか？ 今一つ分からぬ。識者の御教授を乞うものである。]

淋しけれど人は怨まじ嘆くまじ
己が世なれば瘠せもしてまし

「やぶちゃん注…本首も同じく朔太郎満十七歳の時の、『文庫』第二十四卷第六号・明治三六(一九〇三)年十二月に「上毛 萩原美棹」の名義で掲載された十四首連作の六首目、淋しけれど人は恨まじなげくまじ。おのが世なればやせもしてまし。」
と標記違いの相同歌である。」

白百合の君と別れし夜

よめる

み別れに奉る夜のましろ百合
君を一人の姉とも知れな

君は去りぬ残るはわれと小さき世の
月も月かは花は花かは

「やぶちゃん注…朔太郎満十六歳の時、『文庫』第二十四卷第三号(明治三六(一九〇三)年十月発行)に「上毛 美棹」名義で掲載された九首の三首目、君は去りぬ残るは吾と小さき世の月も月かは花は花かはと標記違いの相同歌である。」

その舟よ我等が棹にとどめあへず
ついに空しく流れて去りにき

「やぶちゃん注：「ついに」はママ。」

大御代はこゝに美し春は戀に
かたちどられて咲く櫻花

足んぬ智はあへて願ふ歌の幸さいち
來ん世思はずいらす桂も

「やぶちゃん注：朔太郎満十七歳の時の『文庫』第二十五卷第六号（明治三七（一九〇四）年四月発行）に「上毛 萩原美棹」名義で掲載された九首の六首目、足んぬ智は、敢えてしねがふ歌の幸。來む世思はず、欲らず桂も。の類型歌である。」

才さいえたらで御國はぐゝむ歌もなし
身は弱うしてよる胸もなし

「やぶちゃん注：朔太郎満十六歳の時の、『明星』卯年第十一号・明治三六（一九〇三）年十一月号の「紗燈涼語」欄に「萩原美棹（上毛）」の名義で掲載された三首の第二首目、

かよわくて御國みくにはぐくむ歌もなし身は孤獨ひとりにてよる胸もなし
の類型歌である。」

この戀よ亂れて末は知らなくに
おどろにまどふ紅づたのごと

「やぶちゃん注：朔太郎満十七歳の時の、『文庫』第二十四卷第六号・明治三六（一九〇三）年十二月に「上毛 萩原美棹」の名義で掲載された十四首の十一首目、

この戀よ、亂れて末は知らなくに、おどろにまどふ紅づたのごと。
の標記違いの相同歌である。」

草に伏して美しひとは泣きもやまず
別れもあへず野は暮れせまる

「やぶちゃん注…前歌と同じく、『文庫』第二十四卷第六号・明治三六（一九〇三）年十二月に「上毛 萩原美棹」の名義で掲載された十四首の十一首目、

草に伏して美し人は泣きもやまず、別れもあへず、野はくれせまる。
の標記違いの相同歌である。」

その香ゆへにその花ゆへに人は老を
泣きぬ泣かれぬ濃きべにつばき

「やぶちゃん注…二箇所「ゆへ」はママ。朔太郎満十七歳の時の、『文庫』第二十四卷第六号・明治三六（一九〇三）年十二月に「上毛 萩原美棹」の名義で掲載された十四首の第二首目、

その香ゆゑにその花ゆゑに、人は老を、泣きぬ泣かれぬ、こき紅椿。
の標記違いの相同歌である。」

瑠璃鳥るりとりの鳴けば朝雲さむうして

人とすなほに別れける哉

「やぶちゃん注…原本は「瑠璃鳥」を「瑠理鳥」とするが誤字と断じて訂した。底本校訂本文も「瑠璃鳥」とする。こちらは、朔太郎満十七歳の時の、『明星』卯年第十二号・明治三六（一九〇三）年十二月の「金鶏」欄に「萩原美棹（上野）」の名義で掲載された四首の第二首目、

ひよ鳥の啼くや朝雲寒うして人とすなほに別れけるかな
の類型歌である。」

抱きては交互かたみに泣きし日もありき

世にそむきしも何日の二人ぞ

野に見るは泣くによろしき秋の雨

こし路戀路の思ひ出ぐさよ

相似たる人か木精かひそみきて

呼べは應ふる日なるに似たり

「やぶちゃん注…呼べは」はママ。前と同じ『明星』卯年第十二号・明治三六（一九〇三）年十二月の「金鶏」欄に「萩原美棹（上野）」の名義で掲載された四首の内の巻頭の、

相似たる人か木精かひそみきて呼べは應ふる日なるが如し

の類型歌である。」

たゞきくは人の泣く聲むせぶ聲

陰魔地を這ふこがらしの風

手をあげて招けば肥えし野の牛も

來りぬ寄りぬ何を語らむ

「やぶちゃん注…朔太郎満十七歳の時の、『明星』辰年第六号（明治三七（一九〇四）年六月発行）の「鳴潮」欄に「萩原美棹」の名義で掲載された六首の第五首目、

手をあげて招けば肥えし野の牛も來りぬよりぬ何を語らむ

の標記違いの相同歌である。」

おとなしう涙ぬぐひてあればとて

十九の春はくれであらめや

「やぶちゃん注…朔太郎満十七歳の時の、『坂東太郎』第三十九号（明治三七（一九〇四）年七月発行）に掲載された「夏衣」八首の四首目、

音なしう涙おさへてあればとて春の光はくれであらめや。

の類型歌であるが、本歌の方がいい。」

振り袖の桔梗の花の色よき

なづかしひとゝ涙もよほす

「やぶちゃん注…ちよつと迷ったが「なづかし」はママとした。朔太郎満十九歳の時の、前橋中学校校友会雑誌『坂東太郎』第四十三号（明治三八（一九〇五）年十二月発行）に「萩原美棹」の筆名で所収された「ろべりや」七首連作の三首目に、

振り袖ふりそでの桔梗ききやうの花いろの色いろのよきなつかし人ひとと涙なみだもよほす
とはある。」

夏なつばなの趣おもむきある小家こゝろの人ひとなれば
面影おもかげに似にし戀こゝろもする哉

「やぶちゃん注…同じく朔太郎満十九歳の時の、前橋中学校校友会雑誌『坂東太郎』第四十三号（明治三八（一九〇五）年十二月発行）に「萩原美棹」の筆名で所収された「ろべりや」七首連作の三首目に、

夏花なつばなに趣おもむきある小家こゝろの人ひとなれば面影おもかげに似にし戀こゝろもする哉
の類型歌である。」

鬼おにどもが笑わらふ聲こゑにて戦争たかひは
終はつりぬ勝ちぬ民たみよ悦よろこべ

からくりに見みたる地獄ぢごくの叫喚けいかんが
待ち居まちるものと思おもふ可笑をかしさ

「やぶちゃん注…「地獄」の「獄」は原本では「獄」の上に（くさかんむり）が附く字。朔太郎満十九歳の時の、前橋中学校校友会雑誌『坂東太郎』第四十三号（明治三八（一九〇五）年十二月発行）に「萩原美棹」の筆名で所収された（前に注した「ろべりや」連作の後の歌群）にある、

からくりに見みたる地獄ぢごくの叫喚けいかんが待ち居まちるものと思おもふ可笑をかしさ
の標記ひょうき違いの相同歌である。」

願ねがはくば我われなるものを五人いつたりに

十人とたりになして笑わらひ代かさむ

「やぶちゃん注…校訂本文は「代さむ」を「交さむ」と訂する。」

たゞ一人座すれば淋し天地が
われのくびきにかゝる苦しみ

よろこびは千夜に一夜

たまたまの逢瀬を何なれば更かし給はぬ

あはたゞしの別れ、せちなな君かな

あはたゞし燃ゆる齧の火ぐるまを

忘れて去にしつらき君かな

「やぶちゃん注…前書の「たまたま」の後半は原本では踊り字「へ」、「あはたゞし」はママ、本文の「あはたゞし」もママ。「燃ゆる」は原本は「焼ゆる」であるが、誤字と断じて校訂本文を採った。朔太郎満十八歳の時の、『白虹』第一巻第四号（明治三八（一九〇五）年四月発行）の「小鼓」欄に掲載された五首の巻頭の、

あはたゞし燃ゆる災の火車を忘れていにしつらき君かな

（「災」はママ。誤植と思われる）があるが、前書はない。」

君まつと一日は樂し君を戀ふと

千夜は果敢なき夢みてしがな

綾唄やあるひは牛の遠鳴や^{とほなき}

君まつ秋の野は更けにけり

「やぶちゃん注…「あるひは」はママ。この歌は朔太郎満十八歳の時の、『白虹』第一巻第四号（明治三八（一九〇五）年四月発行）の「小鼓」欄に掲載された、

綾唄やあるひは牛の遠鳴や、君まつ秋の野の更けにけり

及び、朔太郎満十九歳の時、前橋中学校校友会雑誌『坂東太郎』第四十三号（明治三八（一九〇五）年十二月発行）に「萩原美棹」の筆名で載せた、

綾唄や或は牛の遠鳴^{とほ}なきや君待つ^ま秋の野は更^{あき}けにけり

の標記違いの相同歌である。」

風ふきぬ木の實地をうつ秋の夜は

待たるゝ君がさびしき思へ

「やぶちゃん注…この歌は前と同じく『白虹』第一巻第四号（明治三八（一九〇五）年四

月発行)の「小鼓」欄に掲載された、

風ふきぬ木の葉地をうつ秋の夜はまたる々岫かさびしき思へ

の類型句(「木の葉」と「木の實」で有意に異なる)である。なお、底本全集の編者注にはもう一首を参照に掲げているのであるが、指示された頁には相同・相似歌は見当たらない。

この注は前の注と全く同じなので、校正ミスが疑われる。」

み手とりて涙そゝがん日もあらば

歌は桂の根にしづむべし

たゞ願ふ君がかたへにある日をば

夢のやうなるその千とせをば

「やぶちゃん注…この歌は前と同じく『白虹』第一巻第四号(明治三八(一九〇五)年四月発行)の「小鼓」欄に掲載された、

たゞ願ふ君の傍へにある日をば夢のようなるその千年をば

の標記違いの相同歌である。」

われ君を戀す戀しき心より

君を思へば胸たゞ火なり

「やぶちゃん注…この歌も、同じく『白虹』第一巻第四号(明治三八(一九〇五)年四月発行)の「小鼓」欄に掲載された、

われ君を戀はん戀しき心より君を思へば胸ただ火なり

の標記違いの相同歌である。」

わが脣くちと君がみ脣とひたすらに

ふれよいつまで泣いてあるべき

「やぶちゃん注…原本は「ひとすらに」であるが、意味が通らないので、校訂本文「ひたすらに」を採る。」

夜は夜にて晝は晝にて戀はであらば

エトナの山は燃えであるべし

「やぶちゃん注…原本は「焼えであるべし」であるが、意味が通らないので、校訂本文「燃

えであるべし」を採る。太郎満十九歳の時の、前橋中学校校友会雑誌『坂東太郎』第四十三号（明治三八（一九〇五）年十二月発行）に「萩原美棹」の筆名で所収された、

夜は夜にて晝は晝にて戀こいてあらばエトナの山やまはもえであるべし

の類型歌である。「戀こいて」はママ。そこでの注したが再度注しておく、「エトナ」はイタリア南部シチリア島の東部にあるヨーロッパ最大の活火山エトナ山（Etna）。ギリシャ神話ではガイアの息子で不死の怪物の王ティフォンが封じられているとされ、また鍛冶神ヘパイストスはこの山精であるエイトナを愛人とし、その情熱的な生涯の最後の仕事場としてこの山を選んだとも伝えられる。ただ、私が馬鹿なのかこの歌の意味は今一つ、よく汲み取れない。自分の恋情の炎が日夜絶えず激しければ、永遠の火を噴くはずのエトナ山でさえも、その私の情熱故に燃え尽きてしまうであろう、とでもいうのであろうか？ どうも短歌の苦手な私には分からぬ。識者の御教授を乞うものである。」

君が心、今は戀しさに狂はんとす

あゝ如何に君が戀しきなつかしき

たとへんやうもなき戀ひかな

「やぶちゃん注…原本は「なづかしき」であるが、校訂本文「なつかしき」を採った。」

あゝ二人戀しるものと見代はして

笑めばあまねく春はたらひぬ



「やぶちゃん注…「見代はして」は校訂本文では「見交はして」と訂する。「たらひぬ」は自動詞ハ行四段活用「たらふ」（十分である・不足がない／その表象に堪える・資格を持つ）の連用形＋完了の助動詞「ぬ」の終止形。

ここで一つの歌群が終了している。但し、この歌群には次の「ゆふすずみ」のような総題はない。構造から見ると、ここは総題であるところの「若きウエルテルの煩い」の中の同じ「若きウエルテルの煩い」パートであると採れる。以下も注さないが、同様の構成と私は採る。」

ゆうすゞみ

「やぶちゃん注：「ゆう」はママ。」

花やかにかんてらともす齧田を
ふたり出づれば月のぼりけり

「やぶちゃん注：朔太郎満十八歳の時の、前橋中学校校友会雑誌『坂東太郎』第四十二号（明治三八（一九〇五）年七月発行）に「萩原美棹」の筆名で所収された「ゑかたびら」と題する十二首連作の七首目、

花やかに、かんてら燭すえん日を、二人いづれば月のぼりけり。

と標記違いの相同歌である。」

微風そよのうたがたりふく途みちすから

四の袂たもとに螢ほたるおさへぬ

「やぶちゃん注：前橋中学校校友会雑誌『坂東太郎』第四十三号（明治三八（一九〇五）年十二月発行）に「萩原美棹」の筆名で所収された八首連作の四首目、

微風そよかぜの歌語うたかたり吹く途みちすから四の袖そでに螢ほたるおさへぬ

の類型歌である。」

夕ゆづきや橋はしのたもとに衣いしろき

人と別わかれぬ山百合やまゆりのはな

「やぶちゃん注：朔太郎満十八歳の時の、前橋中学校校友会雑誌『坂東太郎』第四十二号（明治三八（一九〇五）年七月発行）に「萩原美棹」の筆名で所収された「ゑかたびら」と題する十二首連作の十一首目、

夕月や橋の袂に衣白き、人と別れぬ山百合のはな。

と類型歌である。「たもと」と「袂」は大きな相違で、実は「袂」は誤りかと疑われる。」

夕月夜潮なる音にあこがれて

君くる路を浪に晝はきぬ

櫻貝ふたつ重ねて海の趣味
いづれ深しと笑み問はれけり

「やぶちゃん注…同じく、前橋中学校校友会雑誌『坂東太郎』第四十二号（明治三八（一九〇五）年七月発行）に「萩原美棹」の筆名で所収された「ゑかたびら」と題する十二首連作の掉尾、

さくら貝、ふたつ重ねて海の趣味、いづれ深しと笑み問はれけり。

と標記違いの相同歌で、初出掲載で注した通り、彼はこの歌が好みだったらしく、その三年後の第六高等学校『交友会誌』明治四一（一九〇八）年十二月号に「水市覺有秋」という標題で掲載された連作中でも、

櫻貝二つ並べて海の趣味いづれ深しと笑み問はれけり
と改作している（この改作は先行作より遙かに劣ると私は思う。）」

海近き河邊に添ひし柳みち
月は二人の肩をすべりぬ

里河さとの底にうつれる星くづを
いくつかぞへて君に逢ふべき

「やぶちゃん注…朔太郎満十九歳の時の、『晩聲』創刊号（明治三九（一九〇六）年四月発行）に「美佐雄」の筆名で所収された六首の掉尾、

里川の底にうつれる星くづをいくつ數へて人にあふべき
の標記違いの相同歌である。」

春の水山吹のせて流れずや
君が家居と指さす方へ

女みなつどひてこゝいほりに庵せよ
美男ぞ多き行く春のくに

御染さまあれ久ひささまとよりそひて
二人ゆく手に闇のあやなき

(踊りさらへの日即興)

「やぶちゃん注…朔太郎満二十歳の時の、『無花果』(明治三九(一九〇六)年十一月発行)に「美棹」の筆名で掲載された一首、

お染さまあれ久さまとより添ひてふたりゆく手に闇のあやなき
の標記違い相同歌である。」

たゞ一人至る仁にいます母上の
おん世悲しく死はなづきえぬ

雨の日や庫裏くりに膝くみ物いはず
叩けど飽かぬ古木魚かな

大聲こゑに柩をあけて呼び出でん
我やとこしへ死なじ老ひじと

「やぶちゃん注…「老ひじと」はママ。」

夏の日や日蔭もとむる唐獅子の
渴きせまると胸やく心地

はなあやめ

共ずみの好み君にして
六月植えぬるべりやの花

「やぶちゃん注…「植え」はママ。「ろべりや」は再注すると、キキョウ目キキョウ科ミゾカクシ(溝隠)属 *Lobelia* のロベリア・エリヌス *Lobelia erinus*、和名ルリチョウソウ(瑠璃蝶草)及びその園芸品種をいう。南アフリカ原産の秋播きの一年草で、高さ二十センチメートルほどでマウンド状に広がる。四月から七月頃に青紫色の美しい花を咲かせ、

花色は赤紫色やピンク・白色などがある。(weblio 辞書の「植物図鑑」にある「ロベリア・エリヌス(瑠璃蝶草)」に拠った。画像は[Google画像検索](#)「*Lobelia erinus*」も参照されたい)。

朔太郎満十九歳の時の、前橋中学校校友会雑誌『坂東太郎』第四十三号(明治三八(一九〇五)年十二月発行)に「萩原美棹」の筆名で掲載された七首連作の巻頭歌、

共住みの好このみ少なき君にして六月植うゑぬるべりやの花

の標記違いの相同歌(「共住み」はママ)。

かきつばたいと美しき人妻は
朝靄いでゝ人思ふさま

春の夜やとある小路におどろきぬ

巨人のやうに見えし水甕みがめに

の、「やぶちゃん注」前の一首と同じ雑誌に「ろべりや」歌群の後に載る八首連作の第六首目

春はるの夜よやとある小路こじに驚おどろきぬ巨人きよじんのように見えし水甕みがめに

の標記違いの相同歌である。」

夏祭すこしはなれて粧ひし
君と扇の風かはしけり

ほとゝぎす女に友の多くして
その音づれのたそがれの頃

「やぶちゃん注」朔太郎満十九歳の時の、前橋中学校校友会雑誌『坂東太郎』第四十三号(明治三八(一九〇五)年十二月発行)に「萩原美棹」の筆名で所収された八首連作の中
の一首、

ほとゝぎす女をんなに友ともの多くしてその音おとづれのたそがれの頃

の標記違いの相同歌である。」

ほととぎす卯の花垣にしば鳴くを
枕はづして聴きたまふさま

「やぶちゃん注…原本は「垣」を「榎」とするが、誤字と断じて校訂本文の「垣」を採った。」

夏の風はにほひて吹きぬ街の子が
夕涼みする團扇づかひに

見かはせば何の奇もなく友はあり
あひ別れては胸やぶるまで

「やぶちゃん注…朔太郎満十九歳の時の、前橋中学校校友会雑誌『坂東太郎』第四十三号（明治三八（一九〇五）年十二月発行）に「萩原美棹」の筆名で所収された八首連作の一首、

見代^{みかは}せば何^{なん}の奇^きもなく友^{とも}はあり相別れては胸^{むね}やぶるまで

標記違いの相同歌である。」

君を戀ふ眞玉白玉そが中の
ひとつ瓦とはぢらふわれは

ひととせにひとと逢ひてひと日をば
千日まつと悲しきたより

水の音蛙の唄につままれて
かゝる夕べをもの言ひしひと

千石の水あぶ心地ひぐらしの
一時に鳴きぬ木陰路入れば

「やぶちゃん注…この一首は朔太郎満二十二歳の時の、第六高等学校『交友会誌』明治四一（一九〇八）年十二月号に掲載された歌群「水市覺有秋」の一首、

千石の水あぶ心地日ぐらしの一時に啼きぬ木陰路入れば
の標記違いの相同歌である。」

むらさきの路傍の花のちいさきを
愛でしかばかりに行く車ひと

(以上二首鹽原温泉途上ノ作)

「やぶちゃん注…「路傍」の「傍」は原本では「ト」ではなく(こざとへん)であるが、校訂本文を採った。「ちいさき」はママ。底本年譜の明治四一(一九〇八)年八月(朔太郎満二十一歳)の条に、『一家で鹽原温泉へ行く。一人で日光へ廻り、中禪寺湖畔に泊る』とある。この一首も前歌と同じく、歌群「水市覺有秋」の一首、

むらさきす路上の花のちいさきを愛づるばかりにゆく車かな

の標記違いの相同歌である。なお、この折りの中禪寺湖湖畔での経験を素材としたと思われる萩原朔太郎の小説「夏帽子」がある(リンク先は私のブログの電子テキスト)。未読の方には是非お勧めしたい作品である。】

驚きぬ日輪みれば紅熱して

日葵向花とくちづけするに



「やぶちゃん注…「日葵向花」「日葵向」の文字列はママ。朔太郎満二十歳の時の、『無花果』(明治三九(一九〇六)年十一月発行)に「美棹」の筆名で掲載された歌群の一首、

おどろきぬ日輪みれば紅熱してひまわりばなとくちづけするに

の標記違いの相同歌である。】

晩秋哀悼歌

わが夢多き少年の日はこゝに終れり

哀悼歌以後われ長く詩を思はざりき

すべて仇敵たれすべて愛人も

面そむけぬ世は劫火たれ

「やぶちゃん注…「劫火」は原本は「却火」。誤字と断じて訂した。校訂本文も「劫火」と

する。」

なまじいにつらき御胸をきく日なく
許すべかりしさいはひ人と

「やぶちゃん注：「なまじい」はママ。一首末原本は「さいはひ人ど」であるが、誤字と断じて」と訂した。校訂本文も「さいはひ人と」とする。」

いかんせん君に捨てられ思ひ子は
石となりても世にありがたき

君といふつめたく美しき石彫お
女神戀して身はやせにけり

執着の涙ぞせめておん髪に
涙となりても降りそゞげかし

われに一人あめつち代へぬ愛人の
ありて樂しときのお思ひぬ

何となく美しければ戀しければ
君とよびしを罪ありやいな

火にくべて大方やくに惜しからぢ
いまは要なき歌のすてがら



「やぶちゃん注：「惜しからぢ」はママ。

因みに、この最後の「晩秋哀悼歌」歌群は「ソライロノハナ」の中でも数少ない、類似歌稿の存在しない全く新発見の歌群である。」

午後

床這ひ行く午後の
日脚をみつめつゝ
悲しき人は何をか思へる
まだ年もうら若きに

「やぶちゃん注…「午後」の標題頁の裏に掲げられている序詩。」

切愛すそのひとことのきゝたさに
あへても死なずありし身なれど

拳もて石の扉をうつ如き
愚かもあへて君ゆへにする

「やぶちゃん注…原本は「拳もて石の扉をもつ如き」、「愚かもあへて」は「愚かもあへて」であるが、以下の先行発表作に基づき、訂した（底本校訂本文も同じく訂している）。朔太郎満二十三歳の時の、『スバル』第一年第十一号（明治四十二（一九〇九）年十一月発行）に「萩原咲二」名義で掲載された歌群の一首、

拳もて石の扉を打つごとき愚^{おろか}もあへて君ゆゑにする
の標記違いの相同歌である。】

體溫機^{しほめく}管^{かん}極熱を

つめたき手してすかし見る君

「やぶちゃん注…「體溫機」体温計。校訂本文は「體溫器」と訂している。」

野守等の唄ふをきけば忘れぐさの
きのふ始めて思ひきざすと

「やぶちゃん注…「思ひきざすと」は原本では「思ひざきすと」であるが、意味不明なので、錯字と断じて校訂本文通り、「思ひきざすと」と訂した。」

寝ざめして淋しき夜なり浪の音を
風のやうにもきく明石潟

(明石の宿にて)

西洋の習慣ならはし好む君ゆへに

別るゝきはも手を口にあつ

我が肺にナイフ立てみん三鞭酒
栓ぬく如き音のするべし

「やぶちゃん注…これは朔太郎、満二十二歳の、明治四二（一九〇九）年十月二日消印萩原栄次宛書簡に載る短歌群の一首、

我が肺にナイフたてみん三鞭酒、栓ぬく如き音のするべし、
の表記違いの相同歌であり、二首目と同じく、後の朔太郎満二十三歳の時の『スバル』第一年第十一号（明治四十二（一九〇九）年十一月発行）に掲載された歌群の一首、
心臓に七首たてよシヤンピアニユ栓抜くごとき音のしつべし
の類型歌でもある。」

拳こぶし固もて石の扉をうつ如き

愚かもあへて君ゆへにする

「やぶちゃん注…原本は「愚かもあへて」は「愚かもあへて」であるが、以下の重出作同様に訂した（底本校訂本文も同じく訂している）。本歌は七首前、本「午後」の第二首目の、
拳もて石の扉をうつ如き

愚かもあへて君ゆへにする
の重出。手書き作成したものであるから、恐らく後から気がついたものの、修正を施さなかつた（施せなかつた）ものと思われる。」

言ひ給へけしうはあらず我とても

この頃知りぬ少しく知りぬ

紅くれないの軍服着たる友の来て
今日も語りぬワグネルのこと

「やぶちゃん注：「くれない」はママ。この「友」は軍人ではなく（日本の軍服に赤いものは襟章を除いてない）イギリスの近衛兵の上着のような（若しくはそのもの）「紅の軍服」を伊達に着ているものと思われる。この一首は、朔太郎満二十二歳の時の、明治四二（一九〇九）年九月一日消印萩原栄次宛葉書に載る二十一首からなる「かゝる日」歌群の一首、くれないの軍服着たる友の来て今日も語りぬワグネルのこと、の標記違いの相同歌である。」

かにかくと何を思ふや嬉しき日
何故わがやうにものを言はれぬ

春ゆうべとある酒屋の店さきに
LIQURの瓶を愛でゝかへりぬ

「やぶちゃん注：この一首は、朔太郎満二十二歳の時の、明治四二（一九〇九）年九月一日消印萩原栄次宛葉書に載る二十一首からなる「かゝる日」歌群の一首、

春ゆうべとある酒屋の店さきにリキユー LIQURの瓶をめてゝかへりぬ
の標記違いの相同歌である。」

春の夜の酒は泡だつ三鞭酒シヤンパンニユー

樂はたのしき戀のメロデイ

「やぶちゃん注：「シヤンパンニユー」はママ。この一首は、朔太郎満二十二歳の時の、明治四二（一九〇九）年九月一日消印萩原栄次宛葉書に載る二十一首からなる「かゝる日」歌群の一首、

春の夜の酒は泡だつシヤンパンニユー樂はたのしき戀の旋律メロヂイ

の標記の著しく異なる類型歌である（私はこれを相同歌とは採らない。）」

樂しされどやゝ足らはぬよ譬ふれば
序樂をきかぬオペラ見るごと

「やぶちゃん注…朔太郎満二十三歳の時の、『スバル』第二年第一号（明治四三（一九〇二）年一月発行）に掲載された歌群の一首、

たのしされどやや足らはぬよ譬ふれば序樂をきかぬオペラみるごと
の標記違いの相同歌である。」

妹が折々すなる態をして
もだして居りぬ女の中に

「やぶちゃん注…不思議な一首である。この「女の中に」「居」るのは「妹が折々すなる態をして」黙ったままでいる朔太郎自身である。」

かなた日はてるてる海の青たゝみ

八疊ひける室に晝睡す

「やぶちゃん注…「ひける」はママ。校訂本文は「しける」と訂する。この一首は、朔太郎満二十二歳の時の、明治四二（一九〇九）年九月一日消印萩原栄次宛葉書に載る二十一首からなる「かゝる日」歌群の一首、

かなた日はてるてる海の青疊八疊しける室に晝寢す

の標記違いの相同歌である。」

八月や日向葵さきぬさかんなる

花は伏屋の軒をめぐりて

「やぶちゃん注…「日向葵」はママ。「伏屋」は屋根の低い小さい家、みすばらしい家。この一首は、朔太郎満二十二歳の時の、明治四二（一九〇九）年九月一日消印萩原栄次宛葉書に載る二十一首からなる「かゝる日」歌群の一首、

八月は日輪花咲きぬ盛んなる、花は伏屋の軒をめぐりて、

の類型歌である。」

朝靄の中をわれ行く君に寄り
ばいぶくわへて今日もきのふも

「やぶちゃん注：「くわえて」はママ。」

ぶらじるの海の色にもよく似ると
君の愛でこしオツパアスかな

「やぶちゃん注：「オツパアス」新発見の明治四二（一九〇九）年九月一日消印萩原栄次宛
葉書にある「かゝる日」歌群の中に、

ぶらじるの海の色にもよく似ると。君の愛でこし青玉かな

という酷似した類型歌があることから、ここに記された「青玉」という漢語は「サファイア」のことを指す。しかし英語の文字列「Sapphire」や発音は、どう考えても「オツパアス」又は「オツパース」とは読めない。これに近いのは同じ宝石の「黄玉」、則ち、「トパーズ」（topaz）しかない。ただこれを誤用と指摘出来るかと言うと、実はトパーズにはブルー・トパーズという青色のものがあるから、これ、一概にトンデモ誤用とは言えない気がするのである。取り敢えず注はしておくこととしたい。」

止めたまへかゝる譬は方便歌

説く口振りに似てあさましゝ

理想など高き聲にて言ひし故
あまたの人にとまれしかな

「やぶちゃん注：この一首は、朔太郎満二十二歳の時の、明治四二（一九〇九）年九月一日消印萩原栄次宛葉書に載る二十一首からなる「かゝる日」歌群の一首、
理想など高き聲にて言ひし故。あまたの人にとまれしかな。
の標記違いの相同歌である。」

指たてゝ驚かす如き眼付する
女をさへも三月戀しぬ

日ぐらしの唱などきゝて居り給ふ
ばいぶに火をばつくるあひだも

目覺ましの自鳴機オルゴールの鳴る音をきゝ
ところも知らぬ、支那の街ゆく

「やぶちゃん注…この一首は、朔太郎満二十二歳の時の、明治四二（一九〇九）年九月一日消印萩原栄次宛葉書に載る二十一首からなる「かゝる日」歌群の一首、

目覺ましの自鳴機オルゴールの鳴る音をきゝ。ところも知らぬ支那の街ゆく
の標記違いの相同歌である。】

自働車の馳せ行くあとを見送りて
涙ながしき故しらぬなり

「やぶちゃん注…これは朔太郎、満二十二歳の、明治四二（一九〇九）年十月二日消印萩原栄次宛書簡に載る短歌群の一首、

自働車のはせゆくあとを見送りて涙ながしぬ故しらぬなり
の表記違いの類型歌である。】

常盤津ときわづの復習さかへもよほす貸席かたせきの

軒提灯のりあしの下に別れぬ

「やぶちゃん注…「常盤津」はママ。正しくは「常磐津」。これは朔太郎、満二十二歳の、明治四二（一九〇九）年十月二日消印萩原栄次宛書簡に載る短歌群の一首、

常盤津ときわづのさらへもよほす貸席かたせきの、軒提灯のりあしの下に別れぬ、（都會の戀は下町に美し）
の表記違いの相同歌である（後書はママ）。】

芝居見て河添かへひかへる夜などは
よくよく人の戀こひしかりけり

「やぶちゃん注…「川添ひ」はママ。ここはどうみても正しくは「河沿ひ」であろうが、珍しく底本は誤字指示がなく、そのまま校訂本文も採っている。】

大坂の夜は美しくし

思ひ出は道頓堀の細小路

小間物店の花瓦斯のいろ



「やぶちゃん注」：「美しくし」はママ。「道頓堀」は原本では「道紺堀」であるが、誤字と断じて「道頓堀」とした。校訂本文も同じく訂する。「花瓦斯」は「はなガス」と読み、種々の形や色に飾りたてた装飾・広告用のガス灯のこと。これは朔太郎、満二十二歳の、明治四二（一九〇九）年十月二日消印萩原栄次宛書簡に載る短歌群の一首、

思ひ出は道根堀どうこんぼりの細小路、小間店の花ガスのいろ（大坂の懐^{こゝ}追はこゝにのみ残れり）の表記違いの相同歌である（後書はママ。錯字をレ点で訂してある）。「小間店」は「小間物店」の脱字と見てよいが、どうもこれから察すると、思い込みの激しい朔太郎が道頓堀を「どうこんぼり」と誤って記憶し続けていたのではないかとも考えられる。」

たそがれ

海ちかき殖民地をばたそがれて
そゞろありきす如きさびしみ

「やぶちゃん注」：「殖民地」はかく書く場合もある。」

淡雪の解くる岡邊に一人きて
はこべをつむもなぐさまぬ哉

冬の日は淋しく沈む野に出でゝ
日暮れはものを思ふならはし

ちゆうりつぷの花咲く頃はうらぶれし
我も野に出で口笛を吹く

君まつと昔いくたび佇みし
門の扉にかゝる落日

場末なる酒屋の窓に身をよせて
悲しき秋の夕雲を見る

「やぶちゃん注…朔太郎満二十六歳の時の、大正二（一九一三）年十月二十八日附『上毛新聞』に発表した連作の一首、

場末ばすへなる酒場さけばの窓まじに身をよせて悲かなしき秋あきの夕雲ゆうぐもを見る
の標記違いの相同歌である。』

宿酔のあしたの床にふと思ふ
そのたまゆらの鈍き悲しみ

晝過ぎのホテルの窓に COCOA のみ
くづれし崖の赫土をみる

「やぶちゃん注…「赫土」はママ。朔太郎満二十三歳の時の、『スバル』第二年第一号（明治四三（一九〇二）年一月発行）に掲載された連作の一首、

窓まじひるすぎの HOTEL の窓に COCOA のみくづれし崖のあかつちをみる
の標記違いの相同歌である。』

何やらん我が若者は白壁に
かくれ語りす雪どけの朝

始めての床に女を抱く如き
ものめづらしき不安なるかな

「やぶちゃん注…朔太郎満二十三歳の時の、『スバル』第二年第一号（明治四三（一九〇二）年一月発行）に掲載された連作の一首、

始めての床に女を抱く如きものめづらしき怖れなるかな
の類型歌である。』

八疊の柱どけいのちくたくと
母の忍ばゆ家を思へば

春の夜は芝居の下座げざのすりがねを

たゞく男もうらやましけれ

「やぶちゃん注…前に同じく『スバル』第二年第一号に前の一首に続けて載る、

春の夜は芝居の下座のすりがねを叩く男もうらやましけれ

の標記違いの相同歌である。」

祭の日寝あかぬ床に寺々の
鐘きく如きものゝたのしさ

「やぶちゃん注…同じく『スバル』第二年第一号に前の一首に続けて載る、

祭の日寝あかぬ床に寺寺の鐘きく如きものたのしさ

の標記違いの相同歌である。」

民はみなちどきあげぬ美しき

捕虜とりこの馬車のまづみえしとき

「やぶちゃん注…朔太郎満二十三歳の時の、『スバル』第二年第四号（明治四三（一九〇二）年四月発行）に掲載された連作の一首、

民はみなちどきあげぬ美しき捕虜とりこの馬車のまづ見えしとき

の標記違いの相同歌である。」

幼き日パン買ひしに行きしその店の

額のイエスの忘れぬかな

「やぶちゃん注…「幼き」の「幼」の字は原本で「力」が「刀」であるが、誤字と断じて校訂本文同様に「幼き」とした。「買ひしに行きし」の「買ひし」の「し」はママ。校訂本文は誤字（衍字）として除去している。以下の先行作から見ても衍字の可能性が極めて強いが、敢えてここはママとする。前に同じく『スバル』第二年第四号に掲載された連作の一首、

幼き日パン買ひに行きし店先の額のイエスをいまも忘れず
の類型歌である。」

寒き風は吹くと思ひぬ故郷の

赤木牧場の古榎ふるえのきより

「やぶちゃん注」：「榎」は原本では「櫛」。この字は鋤・犁すきや鋤、若しくは動詞で、こなす・うちくたく、の意で誤字であるから、校訂本文に従って「榎」とした。赤木には複数の牧場が現存するが、ネット上の調査では同定出来なかった。御存じの方は御教授を乞うものである。この一首は、前の一首と同じく『スバル』第二年第四号（明治四三（一九〇二）年四月発行）に掲載された、

寒き風吹くと思ひぬ故郷の赤城の牧の古榎より
の類型歌である。」

青山の原に捨てたる文がらを
行方も知らず吹く冬の風

靴ぬぐとかの玄關の鋪石に
涙おとしぬ放浪の子は

「やぶちゃん注」：原本では「鋪」は「石」＋「甫」であるが、誤字と断じて、校訂本文に従い、「鋪」とした。」

君よぶと口笛ふきてかくれたる
昔の家の青桐の花

ステツキを振りつゝ街を行くことの
悲しくなりぬ何となけれど

さかづきをかちと合はせて靴音と
樂の響のうづまきに入る

寒き夜もあひ抱き跳ること知らぬ
この島びとは憐れなるかな

「やぶちゃん注」：「跳る」の「跳」はママ。校訂本文は「踊る」とする。「この島びと」不

詳。」

歌舞伎座の運動場にて見し人を
伊香保の町の石段に見き

「やぶちゃん注…「歌舞伎座」原本は「歌舞妓座」。誤字として訂した。校訂本文も「歌舞伎座」とする。「歌舞伎座の運動場」というのは当時の歌舞伎座の内部に存在した施設である。[ウイキの「歌舞伎座」](#)によると、『歌舞伎座は、明治の演劇改良運動の流れを受けて開設された。この運動の提唱者の一人でジャーナリストの福地源一郎（福地桜痴）と金融業者の千葉勝五郎の共同経営で』、明治二二（一八八九）年に東京市京橋区木挽町に開設されたものを第一期とするが、「建物の変遷」の項の「第一期（一八八九年竣工）」によれば、この時の観客席は三層構造となっており、三『階の一幕見席の後ろには運動場を作り、ここに食品、小間物などの売店があ』ったとある。ちよつとイメージしにくいですが、現在の遊戯室のような、スペースのことであろうか。識者の御教授を乞うものである。」

おちかた
遠方へ行くてふ齋冊の小窓より

あるとき見たる石楠しやへんなの花

「やぶちゃん注…「おちかた」はママ。」

さ霧つゆたつ妻込山の鶏鳴に

ほの白々とあくる東雲しのいめ

「やぶちゃん注…「妻込山」は校訂本文では「妻籠山」に訂されてある。長野県木曾郡南木曾町吾妻にある妻籠城址は別名妻籠山と呼ばれている。知られた妻籠宿の直近にある。ここか。」

くろがねの扉を固く閉す君
門の柱にすゝり泣くわれ

しかれども君てふものゝあることを
知らで過ぎたる十九またよし

遠方の村の白壁二三點
白々かなしく光る十月

「やぶちゃん注…原本は下句「白々かなしく光る十月」であるが、意味不明。校訂本文通り、「かなしく」の誤字と断じて訂した。」

町内の屋臺をひきし赤だすき
十四の夏が戀の幕あき

「やぶちゃん注…この一首は朔太郎満二十四歳の時の、『スバル』第三年第三号（明治四四（一九〇三）年三月発行）に掲載された

町内の屋臺を引きし赤だすき十四の夏が戀の幕あき
の標記違いの相同歌である。」

河岸藏のかの白壁ぞ戀しけれ
戀の手習いろいろのこと

さくさくと靴音させて中隊の
すぎたるあとに吹く秋の風

「やぶちゃん注…この一首は、朔太郎満二十六歳の時の、大正二（一九一三）年十月十一日附『上毛新聞』に掲載された、

さくさくと靴音くつおとさせて中隊ちゆうたいのすぎたるあとに吹く秋あきの風かぜ
の標記違いの相同歌である。」

椽ばたに疲れし顔が煙草吸ふ
教師の家の家の庭のこすもす

「やぶちゃん注…「椽」はママ。校訂本文は「齧」と訂するが、芥川龍之介など、「齧」を「椽」と書く慣用例は頗る多いので、訂せずそのままとした。本歌は朔太郎満二十四歳の時の、『スバル』第三年第四号（明治四四（一九〇三）年四月発行）に掲載された、縁端に疲れし顔の煙草吸ふ教師の家の庭のこすもすの標記違いの相同歌である。」

野分こそいと可笑しけれ花合の
猪つける札思ひ出づ

きさらぎや笛の稽古の通ひたる
我が故郷の橋のうす雪

「やぶちゃん注…朔太郎満二十三歳の時の、『スバル』第二年第四号（明治四三（一九〇二）年四月発行）に掲載された、

二月や笛の稽古に通ひたる故郷の町の橋のうす雪
の類型歌である。」

前橋の電話交換局にありといふ
わが初恋の人のせうそこ

ある宵のそゞろありきにピンポンの
音を床しみ透き見せし家

行く春の淡き哀しみのインソップの
蛙の腹に破裂せし音

「やぶちゃん注…朔太郎満二十三歳の時の、『創作』第一卷第四号・明治四三（一九〇二）年六月号に掲載された、

行く春の淡き悲しみいそつぷの蛙のはらの破れたる音
の標記違いの相同歌である。」

清元の神田祭のメロディに
似たる戀しぬたちばなの花

「やぶちゃん注…同じく『創作』第一卷第四号・明治四三（一九〇二）年六月号の一首、
清元の神田祭のメロディに似たる戀しぬたちばなの花
の標記違いの相同歌である。」

わが妹初戀すとは面白し
オーケストラの若き笛ふき

「やぶちゃん注…同じく『創作』第一巻第四号・明治四三（一九〇二）年六月号の一首、わが妹初戀すとは面白しオーケストラの若き笛ふきの標記違いの相同歌である。」

ある宵のオペラの序幕合唱隊コーラスの中に見し人わすられぬ哉

「やぶちゃん注…「合唱隊」はママ。底本校訂本文は「合唱隊」と訂する。従わない。」

花祭女王の君が車ひく

あはれなる子は涙ながして

岡山の高等學校の庭にさく
だありやの花こすもすの花

「やぶちゃん注…「岡山の高等學校」第六高等学校（現在の岡山大学）。以前にも注したが、朔太郎は明治三九（一九〇六）年満十九歳の三月に群馬県立前橋中学校を卒業後、同年中に前橋中学校補習科や早稲田中学校補習科を経て、翌四十年九月に熊本の第五高等学校第一部乙類（英語文科）に入学したが、同年七月に第一学年を落第、同月、岡山の第六高等学校を受験して合格、同年九月に同校第一部丙類（独語文科、独語法科）に入学している。因みに但し、結局、定期試験を受けずに問題視されて六高も翌明治四十二年七月に落第、翌四十三年四月には慶応義塾大学部予科一年に入学するも同月中に退学（理由不明）、同年六、七月頃には六高もまた退学している（当時、チフスに罹患しており、表向きの退学理由はそれであるように底本年譜の記載では読めるように書かれてある）。学歴の仕切り直しは明治四四（一九一一）年五月の応義塾大学部予科一年の再入学であるが、ここもまたしても六ヶ月後の同年十一月に退学し、これが萩原朔太郎の最終学歴となった。」

冬枯れの畑の上に工場の
煙たなびく角筭のあさ



「やぶちゃん注…「角筭」（つのはず）は旧淀橋区、現在の東京都新宿区の南西部にかつてあった地名。現在の新宿区西新宿・歌舞伎町・新宿の一部に相当する。因みに参照したウイキの「角筭」によれば地名の由来は『諸説あるが、新宿区教育委員会では』『角筭周辺を

開拓した渡辺与兵衛の髪の毛の束ね方が異様で、角にも矢筈にも見えたことから、人々が与兵衛を角髪または矢筈と呼び、これが転じて角筈となった』という『説を有力としている』とある。「角筈」とは一般名詞としては、弓矢の筈（矢の端の弓の弦に番える切り込みのある部分。矢筈）を動物の角で作ったものをいう。」

何處へ行く

どこへゆくこの旅びとのせはしなき
あとに光れる青き貝がら

「やぶちゃん注…標題の裏頁に配された一首。」

胸をうつこの引金をひく人を
得んとばかりにわれ戀を戀ふ

夕さればそぞろありきす銃器屋の
前に立ちてはピストルを見る

「やぶちゃん注…原本は「夕されば」。校訂本文に従った。朔太郎満二十三歳の時の、『スバル』第二年第一号（明治四三（一九〇二）年一月発行）に掲載されたうちの一首、夕さればそぞろありきす銃機屋のまへに立ちてはピストルをみるの標記違いの相同歌である。」

いと可笑し蚤とる如き眼して

交互かたみに求む戀のありかを

この心言ふはあさまし然れども

言はねば尚もけだものに似る

あゝえたえず、と思ふときは日記にきをくり

死なんと書きて心しづまる

「やぶちゃん注…この一首は、朔太郎満二十二歳の時の、明治四二（一九〇九）年九月一日消印萩原栄次宛葉書に載る二十一首からなる「かゝる日」歌群の冒頭の一首、

あゝえたえず、と思ふときは日記をくり。死なんと書きて心しづまる、
の標記違いの相同歌である。』

ピストルを持ちて歩けば巡査よび
とがめぬ、これは我を憐つため

「やぶちゃん注…この一首は、朔太郎満二十二歳の時の、明治四二（一九〇九）年九月一日消印萩原栄次宛葉書に載る二十一首からなる「かゝる日」歌群の一首、

ピストルを持ちて歩けば巡査よびとがめぬ、これは吾を憐つため
の標記違いの相同歌である。』

「われ死なむ」「あゝ死にたまへいつにても」
かく言ふ故に死なれざりけり

「やぶちゃん注…これは朔太郎、満二十二歳の、明治四二（一九〇九）年十月二日消印萩原栄次宛書簡に載る短歌群の一首、

「われ死なむ」「あゝ死に玉へいつにても」かくいふ故に死なれざりけり、（戀なくして死ぬるは淋し）

の表記違いの相同歌である（後書はママ）。』

同人數そうぞめかして練り來ると
きゝてはせ見るともらひなりき

「やぶちゃん注…「そうぞ」はママ。「装束」で「さうぞ」が正しいか。校訂本文は「さうぞ」とする。「ともらひ」は「弔ひ」の音変化であるが、上句の「同人數」の謂いが私にはよく分からない識者の御教授を乞うものである。この一首は、朔太郎満二十二歳の時の、明治四二（一九〇九）年九月一日消印萩原栄次宛葉書に載る二十一首からなる「かゝる日」歌群の一首、

同人數そうぞめかして練りくるときいてはせみるともらひなりき、
の標記違いの相同歌である。』

瓶子へいじもて机たゝける我が友を

「鬼」と罵り耳うつ女

酒のめば龜の子のごと頸ふりて
わからぬことを唄ふたのしき

酔ひしれて何をか言ひし友等みな
去りぬこのとき我れ流涕す

「やぶちゃん注…これは朔太郎、満二十二歳の、明治四二（一九〇九）年十月二日消印萩
原栄次宛書簡に載る短歌群の一首、

酔ひしれて何をか言ひし友らみな、去りぬこのときわれ流涕す、
の表記違いの相同歌である。」

その女何とか言ひてわが肩を
ふたつ叩きしことがうれしき

「やぶちゃん注…この一首は、朔太郎満二十二歳の時の、明治四二（一九〇九）年九月一
日消印萩原栄次宛葉書に載る二十一首からなる「かゝる日」歌群の一首、

その女何とか言ひて吾が肩をふたつたゝしことがうれしき
の標記違いの相同歌である。」

襟しろき女に見とれ四ツ辻の
電信柱に突きあたりけり

「やぶちゃん注…これは朔太郎、満二十二歳の、明治四二（一九〇九）年十月二日消印萩
原栄次宛書簡に載る短歌群の一首、

襟えり白しろき女に見とれある町の電信柱はしむにつきあたりけり
の類型歌である。」

脳病と自ら言ひて學校を
怠ける男歌をよく詠む

學問のきらひの男今日もきて
戀の話をして歸りけり

「やぶちゃん注…この一首は、朔太郎満二十二歳の時の、明治四二（一九〇九）年九月一

日消印萩原栄次宛葉書に載る二十一首からなる「かゝる日」歌群の一首、

學問のきらひの男今日もきて。戀の話をしてかへりけり
の標記違いの相同歌である。」

湯あがりを惚れる女もあらんかと
あかるき夜の街をゆきゝす

「やぶちゃん注…「惚れる」は原本では「惚れる」。誤字と断じて校訂本文を採った。」

口をあけとぼけ面してある町の

二丁が程は知らで歩みき

「やぶちゃん注…「二丁」約二百十八メートル。これは朔太郎、満二十二歳の、明治四二（一九〇九）年十月二日消印萩原栄次宛書簡に載る短歌群の一首、

口をあけとぼけ面してある街の二丁が程は知らであゆみき、

の表記違いの相同歌である。」

居酒屋のまへにとまりてふところの

錢をかぞふることが樂しき

踵あげ怒りてものをぐさど踏む

それが墓がへるなりき氣味の悪さ悪さ

「やぶちゃん注…これは朔太郎、満二十二歳の、明治四二（一九〇九）年十月二日消印萩原栄次宛書簡に載る短歌群の一首、

かゝとあげ怒りて物をぐさとふむ、それが墓なりき氣味の悪さ悪さ、

の表記違いの相同歌である。」

死なんとして踏切近く來しときに

齧冊の煙みて逃げ出したりき

「やぶちゃん注」：「齣」の「齣」は原本では「米」＋「氣」であるが、誤字と断じて「齣」とした。校訂本文は無論、「汽車」とするが採らない。これは朔太郎満二十三歳の時の、『スバル』第二年第一号（明治四三（一九〇二）年一月発行）に掲載された一首、
死なんとて踏切近く來しときに汽車の煙をみて逃げ出しき
の類型歌である。」

この男寝ても覺めても煙草のむ
悲しきくせをおぼへけるかな

「やぶちゃん注」：「おぼへ」はママ。

ボンボンの中より甘きキララソオを
吸ふ心もおん胸にゆく

「やぶちゃん注」：「キララソオ」はママ。校訂本文は「キュラソオ」とする。採らない。「Curacao」（キュラソー）はリキュール酒の一種で西インド諸島のキュラソー島特産のオレンジの皮を味つけに用いるのでこの名がある。やや苦みのある甘い洋酒で酒精分三〇〜四〇%と高い。色は無色・褐色・緑色など各種ある。」

ともすれば口をゆがめて延次郎えんじろう

假聲こはいろつかふ人を忘れず

「やぶちゃん注」：「假聲こはいろ」はママ。校訂本文は「聲色こわいろ」とする。採らない。「延次郎」とは

歌舞伎役者の名跡河内屋實川延二郎じつかわえんじろうと思われ、創作年代から見ても、明治一九（一八八六）年に九歳で二代目實川延二郎の名で初舞台を踏み、後に延若えんじやくを襲名（大正四（一九一五）年）した初代實川延若の長男二代目實川延若（明治一〇（一八七七）年〜昭和二六（一九五一）年）かと思われる。参照した[ウィキの「實川延若（2代目）」](#)によれば、戦前、濃厚な上方の芸風が批評家に高く評価されたとあり、『口跡に優れ、時代がかった口調から急に世話にくだける間が絶品であった。類い稀な演技力もさることながら、立派な押し出しと色気の有る目元が、得も言われぬエロチシズムを生み出し、「油壺からでたような」という

評が与えられた。その色気力は『双蝶々曲輪日記・引窓』の濡髪をつとめたとき、あまりの凄さに与兵衛で舞台を共にした初代中村鴈治郎が嫉妬したほどだった。『色気の有り芸については、延二郎時代、初めて東京の舞台に立ったときに「上味酩で煮上げたような」と評されている』とある役者である。」

島子てふ藝者がくれしハンカチを
母に見られし一大事かな

浅草の活動寫眞に今日もゆく
女の髪の毛を嗅ぎに行く

「何なれば羊の如くさまよふや」

「死ぬべき場所を求めんがため」

年ごろをくせともなりぬピストルを
ふとんの下に敷きて寝ること

いづこにか我は行くべき今日もまた
電車に乗りて街をめぐれり

寄宿舎の裏門を出で旅泊屋はたしやに

しのびて行くは一人泣くため

「やぶちゃん注…校訂本文は「旅泊屋」を「旅籠屋」とする。採らない。」

涙川ながれを早みのる舟の
棹さしかねついでち行くらん

「やぶちゃん注…この一首は、朔太郎満二十二歳の時の、明治四二（一九〇九）年九月一日消印萩原栄次宛葉書に載る二十一首からなる「かゝる日」歌群の一首、涙川ながれを早みのる舟の、棹さしかねついでち行くらん、の標記違いの相同歌である。」

大雷雨すぎたるのちの遠鳴とほなりを

温泉の中にきくころよき



午後三時會社をいづるスコッチの
中にまぢりて我が影も行く

「やぶちゃん注：「まぢりて」はママ。「スコッチ」スコッチ・ツイード (Scotch tweed)。スコットランド産の羊毛の紡糸糸を用いて機械織りしたざっくりとした毛織物。因みに英語の「tweedy」には、ツイードを着た(好む) 以外に、田舎に住む上流階級らしいという意がある。」

パノラマの暗き階子を登るより
すこしまさりし不安なるかな

(初めて女を抱けり)

「やぶちゃん注：「階子」はママ。校訂本文は無論、「梯子」とする。ここで述べておくが(今までもそのセオリーで電子化してきているのであるが)、私は誤字や当て字であってもそれを訂せずとも分かり、意味として全く問題なく採れて認識出来る場合は、改訂すべきではないと考えている。

「パノラマ」上野及び浅草にあったパノラマ館のイメージと思われる。以下、サイト「meijitaiho.net」の「[パノラマ館](#)」の記載によれば、日本初登場となったパノラマ館は明治二三(一八九〇)年五月七日(朔太郎未だ満四歳である)に上野公園内に開館した「上野パノラマ館」で、戊辰戦争の白河の戦いを描いた「奥州白川大戦争図」を配したこのパノラマ館は同公園で開催中だった第三回内国勸業博覧会の人出もあって大きな人気を集めた。続いて、一週間後の五月二十三日には浅草公園六区内に日本で二番目のパノラマ館「日本パノラマ館」が登場している。数あるパノラマ館の中でもとりわけ高い人気を集めたこの日本パノラマ館は、円形小屋で直径三十六メートル・全高約三十メートルという当時としては異様に巨大にして高層の建物であった(華族女学校や農商務省舎を手がけた建築家にいのみたかま新家孝正の設計)。サンフランシスコ直輸入の本格的な南北戦争図を配したその圧倒的なパノラマは開館直後から大人気となり、五ヶ月間で二〇万人もの観客を動員したとある。朔太郎は「[パノラマ館にて](#)」(リンク先は「宿命」(昭和一四(一九三九)年創元社刊)版)。

[初出形「青色のさびしい光線」](#)も参照されたい。孰れも私の電子テキストである）を詠み、同詩集末の「附録 散文詩自註」に本詩の自註も掲げており、そこから一部を引用すると（[「パノラマ館にて」](#)のリンク先に同註全文を掲げてある。なお、傍線はやぶちゃん）、

*

パノラマ館にて 幼年時代の追懐詩である。明治何年頃か覚えませんが、私のごく幼ない頃、上野にパノラマ館があつた。今の科学博物館がある近所で、その高い屋根の上には、赤地に白く PANORAMA と書いた旗が、葉櫻の陰にへんぼん翩翩としてゐた。私は此所で、南北戦争とワータルローのパノラマを見た。狭く暗く、トンネルのやうになつてゐる梯子段を登つて行くと、急に明るい廣闊とした望樓に出た。不思議なことには、そのパノラマ館の家の中に、戸外で見ると同じやうな青空が、無限の穹窿となつて廣がつてるのだ。私は子供の驚異から、確かに魔法の國へ来たと思つた。（中略）

館全體の構造は、今の國技館などのやうに圓形になつて居るので、中心の望樓に立つて眺望すれば、四方の全景が一望の下に入るわけである。そこには一人の説明者が居て、畫面のあちこちを指さしながら、絶えず抑揚のある聲で語つてゐた。その説明の聲に混つて、不斷にまたオルゴールの音が聴えてゐた。それはおそらく、館の何所かで鳴らしてゐるのであらう。少しも騒がしくなく、静かな夢みるやうな音の響で、絶えず子守唄のやうに流れてゐた。（その頃は、まだ蓄音機が渡來してなかつた。それでかうした音楽の場合、たいてい自鳴機のオルゴールを用ゐた。）

パノラマ館の印象は、奇妙に物靜かなものであつた。それはおそらく畫面に描かれた風景が、その動體のままの位地で、永久に靜止してゐることから、心象的に感じられるヴィジョンであらう。馬上に戰況を見てゐる將軍も、銃をそろへて突撃してゐる兵士たちも、その活動の姿勢のまま、岩に刻まれた人のやうに、永久に靜止してゐるのである。それは環境の印象が、さながら現實を生寫しにして、あだかも實の世界に居るやうな錯覺をあたへることから、不思議に矛盾した奇異の思ひを感じさせ、宇宙に太陽が出来ない以前の、劫初の靜寂を思はせるのである。特に大砲や火藥の煙が、永久に消え去ることなく、その同じ形のまま、遠い空に夢の如く浮んでゐるのは、寂しくもまた悲しい限りの思ひであつた。その上にもまた、特殊な館の構造から、入口の梯子を昇降する人の足音が、周圍の壁に反響して、遠雷を聴くやうに出來てゐるので、あたかも畫面の中の大砲が、遠くで鳴つてゐるやうに聴えるのである。

だがパノラマ館に入った人が、何人も決して忘られないのは、油繪具で描いた空の青色である。それが現實の世界に穹窿してゐる、現實の青空であることを、初めに人人が錯覺することから、その油繪具のワニスの匂ひと、非現實的に美しい青色とが、この世の外の海市のやうに、阿片の夢に見る空のやうに、妖しい夢魔の幻覺を呼び起すのである。

*

以下、参考先「[meijitaisho.net](#)」の「[パノラマ館](#)」から引用すると、かくも『圧倒的な視覚

体験を提供したパノラマ館でしたが、背景の巨大な図絵や前景の造作物等、規模が大がかりなパノラマは、新図を頻繁に入れ替えることは困難で、人気の維持には苦勞していたようです。いずれのパノラマ館も、開館当初は高い人気を集めますが、最初の感動が強いだけに同じ絵のままでは飽きられるのも早く、しばらくすると客足は途絶えがちになります。そのため何とか数年ごとに新図に入れ替えて、客足を呼び戻すというかたちが専らでした。『しかしこのように更新のサイクルが遅く、加えて基本的には絵が静止したままのパノラマは、上映の入れ替えが頻繁で、実像が動き続ける新時代の見世物にはかなうべくもありません。』明治四十年代に『入って国内に活動写真が全盛し始めると、その人気を奪われるのに時間はかからず、大正時代を待たずに相次いでその姿を消していきました。一時は大変な人気を集めた日本パノラマ館も、日露戦争の頃まではなんとか客足をつないだものの、その後は急速に人気を失って』明治四二（一九〇九）年に閉鎖したとある。

さて、本「ソライロノハナ」の「自叙傳」のクレジットは大正二（一九一三）年四月（同年四月時点で朔太郎は満二十七歳であった）ではあるが、次の次の一首の元が明治四三（一九〇二）年六月以前の句であるから、この歌の作品内時制をそれ以前（上野や浅草のパノラマ館があった時期）と考えることはなんら問題なく、まさに浅草の日本パノラマ館（と限定しているわけではないが、私には恐らくは啄木の短歌などの影響か、何故かそれらしく思われてしまうがないのである。悪しからず）の閉鎖される直前の景とするのも、これもまた哀感を興に添えるという気が私にはするのである。」

鶏鳴すかく言ひ君をかい抱く

きぬぎぬこそはまたなかりけれ

しかれども悲劇の中の道化役者の

一人として我は生くべき

「やぶちゃん注…この一首は、朔太郎満二十三歳の時の、『創作』第一巻第四号・明治四三（一九〇二）年六月号に掲載されたものの一首、

しかれども悲劇の中の道化役の一人として我は生くべき
標記違いの相同歌である。」

いかならん尚も流涕したまふは
悲劇の幕のとぢしのちにも

不覺にも胸さはがせて背後うしろより

おどかす君がにくきたくらみ

「やぶちゃん注：「さはがせて」はママ。」

尊氏といふわが伯父は日の本に
すこし過ぎたる人なりしかな

「やぶちゃん注：「尊氏といふわが伯父」不詳。萩原家には父光蔵（萩原玄隆三男）の上には長男玄得（腸チフスで早逝）と次男玄碩という伯父がおり、この玄碩という人物が医家であった。主家萩原家第十一代目を継いでいる（養子先から戻ったらしい）が、この人物を指すのではあるまいか？（母方の八木家には俊一郎という叔父はいるものの伯父はいない）。大阪府八尾市立図書館公式サイト「デジタルアーカイブ」内の「[萩原朔太郎](#)」によれば、祖父玄隆は八尾の旧家の出で、『朔太郎の父密蔵は、八尾市南木の本で代々続く医家の三男として生まれ』（嘉永五（一八五二）年）、明治一四（一八八一）年に『東京帝国大学医学部別科を卒業後、群馬県立病院の医師として前橋に赴任。土地の素封家の娘と結婚し』（密蔵三十五歳、妻ケイ（朔太郎の母）二十歳。但し、密蔵は五歳若く年齢を詐称していた。ケイは終生それを信じていたと底本全集の年譜にある）明治一九（一八八六）年十一月一日に朔太郎が誕生、自身の医院を『開業したのはその前年で、前橋随一の名士として市の医師会長まで勤め』たとあり、その後『八尾の本家は、密蔵の次兄玄碩が継ぎ、現在はその孫にあたる隆氏が、萩原家16代目として家業（内科医院）を継いでおられ』、『隆氏の父栄次は、医師であると同時に短歌をたしなむ風雅の人で、朔太郎の良き理解者でもあり』、『朔太郎は、八歳年長のこの従兄を兄とも慕い、終生敬愛してやま』ず、『朔太郎の第一詩集『月に吠える』の初版は栄次に捧げられ』ている。『隆氏は、昭和54年、筑摩書房から『若き日の萩原朔太郎』を上梓されました。自己の内面を赤裸々に吐露した朔太郎の栄次宛書簡に著者ならではの解説が付された本書は、すぐれた“朔太郎論”であるとともに、ふたつの高貴なる魂の交友録だといえるでしょう。また、『河内どんこう 60号』にも『我が家と萩原朔太郎』という隆氏の一文が掲載されています』とある。この現在の萩原朔太郎の伯父の子孫の名前が「隆」（「たかし」であろう）というお名前であることに着目したい。全集の系図に出る「玄碩」という名は如何にも昔の医家の号そのものである。この人は実はこの「隆」という名に響きも合う「尊氏」というのが本名であったのではあるまいか？ 識者の御教授を乞うものである。」

櫻さく夷の國に生れしは

いかなる母が不覺なりけむ

「やぶちゃん注…朔太郎の母ケイは旧厩橋松平藩藩士で当時は師範学校副校長（県衛生課兼務）であった八木始の長女で、慶応三（一八六七）年に前橋で生まれている。父始は古武士風の厳格な性格で子弟への躰も厳しかったが、一面ハイカラ趣味の持ち主でもあったと年譜にある。彼女と朔太郎の異常とも言える母子の愛情関係はよく知られたところではあるが、ここで朔太郎が述べているこの「母が」「櫻さく夷の國に生れ」としまったことは想像を絶するほどに「不覺」であったことであろう、と述懐するその具体的な核心部分にはよく分からない。識者の御教授を乞うものである。」

相乗りの俾の上に君とわれ
盗ずりせしをたれか知るべき

夕ざればハーモニカ吹く少年の
群れにまぢりて齧口を行く

「やぶちゃん注…「夕ざれば」「まぢりて」はママ。」

春の夜の芝居の木戸のくらやみに
待たれし人の恨まれしかな

百人の若き姫等が振りかざす
櫻の枝にうたれ死なばや

やゝ咲きしあつき息する紅の
牡丹の花にくちびるをあつ

こゝろもち重き島田を傾むけて
酒すゝむるが忘れぬかな

「やぶちゃん注…「傾むけて」はママ。」

燈臺の光とゞかぬ岩影を
知りて來にこし我等ならねど

「やぶちゃん注…底本の原文表示の後には『「來にこし」は原文のまま。』という編者注記がある。」

新宿のかの居酒屋の小娘と
もの言ふほどに成りにける哉

君が手に銀貨はなるゝ一刹那
浪にかくれぬ黒き男は

(江の島にて即興)

「やぶちゃん注…「一刹那」は原本では「一切刹」。誤植と断じて訂した。校訂本文も無論「刹那」と訂する。このシチュエーションは江の島裏手南側にある稚児ヶ淵を下った先、第一岩窟の前方にある海食崖下の魚板石の光景である。

私がテキスト化した明治三一(一八九八)年八月二十日発行の『風俗畫報』臨時増刊「江島・鶴沼・逗子・金澤名所圖會」の「江島」の部の「江島案内」の中の龍窟を概説した後(私の当該テキストに送り仮名を追加し、句読点・濁点・ルビなどを変更したり増やして読み易く補正した)、

*

窟を出れば、前に平坦なる巨岩あり。其の幅、七・八間、之を魚板石といふ。其の形、魚板に似たるを以て名づく。竝立すれば、風光の美なる兒が淵に優り。人をして轉々歸るを忘れしむ。但し、激浪、常に來りて岩角を齧めば、或ひは全身飛沫を蒙ることあり。

此邊に潜夫群居して、遊客の爲めに身を逆さにし、海水に没入し、鮑若しくは海老・榮螺等を捕へ來る。又錢貨を投ずれば、兒童、水底に入りて之を探り、或ひは身を水上に翻轉して、遊客の笑觀に供す。亦、一興といふべし。

*

とある。この朔太郎の体験は、まさにこの記事の書かれた数年後の経験である。そもそも、この「魚板石」での漁師たちのパフォーマンスは、今から三百年以上も前の、貞亨二(一六八五)年に板行された最古の鎌倉地誌である水戸光圀の「新編鎌倉志卷之六」にさえ既に記されている。以下もその私の電子テキストから引こう(一部を読み易く変えた)。

*

魚板石 龍穴の前にあり。面平かにして魚板の如し。遊人或は魚を割き、鰻を取らしめ

て見る。此の石上にて四方を眺望すれば、萬里の廻船數百艘、海上にうかめり。豆・駿・上・下總・房州等の諸峯眼前に有り。限り無き風景なり。

*

ついでに、やはり私の電子化しているエドワード・モースの「日本その日その日」E・S・モース（石川欣一訳）の「第五章 大学の教授職と江ノ島の実験所」からも同じシークエンスを引用しておこう。

*

翌朝我々は夙く起き、長い往来を通つてもう一軒の茶屋へ行つた。ここは実に空気がよく、そして如何にも景色がよいので、私は永久的に一部屋借りることにした。海の向うの富士山の姿の美しさ。このことを決めてから、我々は固い岩に刻んだ段々を登つて、島の最高点へ行つた。この島には樹木が繁茂し、頂上にはお寺と神社とがあり、巡礼が大勢来る。いくつかの神社の背後で、島は海に臨む断崖絶壁で突然終つている。ここから我々は石段で下の狭い岸に降り、潜水夫が二人、貝を求めて水中に一分と十秒間もぐるのを見た。彼等が水面に出て来た時、我我は若干の銭を投げた。すると彼等はまたももぐつて行つた。銅貨ほしさにもぐる小さな男の子もいたが、水晶のように澄んだ水の中でバシヤバシヤやつている彼等の姿は、中々面白かつた。

*

ちなみにこれは明治一〇（一八七七）年の夏の情景である。

——そうして——ここからが私の注の真骨頂だ（既にその「新編鎌倉志卷之六」の当該項に私が附している注をほぼそのまま引く）。

萩原朔太郎といえは芥川龍之介だ！

芥川龍之介と江の島との関連で余り取り上げられることがないが、芥川龍之介の未完作品「大導師信輔の半生」の最終章「六 友だち」には、その掉尾に、このまさに魚板石付近を舞台にした印象的なエピソードが語られているのである！ やはり私のテキストから当該部を引用しておく。

*

信輔は才能の多少を問はずに友だちを作ることとは出来なかつた。標準は只それだけだつた。しかしやはりこの標準にも全然例外のない訣ではなかつた。それは彼の友だちと彼との間を截断する社會的階級の差別だつた。信輔は彼と育ちの似寄つた中流階級の青年には何のこだわりも感じなかつた。が、纔かに彼の知つた上流階級の青年には、——時には中流上層階級の青年にも妙に他人らしい憎悪を感じた。彼等の或ものは怠惰だつた。彼等の或ものは臆病だつた。又彼等の或ものは官能主義の奴隷だつた。けれども彼の憎んだのは必しもそれ等の爲ばかりではなかつた。いや、寧ろそれ等よりも何か漠然としたものの爲だつた。尤も彼等の或ものも彼等自身意識せずこの「何か」を憎んでゐた。その爲に又下流階級に、——彼等の社會的對蹠點に病的な毒舌を感じてゐた。彼は彼等に同情した。

しかし彼の同情も畢竟役には立たなかつた。この「何か」は握手する前にいつも針のやうに彼の手を刺した。或風の寒い四月の午後、高等學校の生徒だつた彼は彼等の一人、——或男爵の長男と江の島の崖の上に佇んでゐた。目の下はすぐに荒磯だつた。彼等は「潜り」の少年たちの爲に何枚かの銅貨を投げてやつた。少年たちは銅貨の落ちる度にぼんぼん海の中へ跳りこんだ。しかし一人海女あまだけは崖の下に焚いた芥火の前に笑つて眺めてゐるばかりだつた。

「今度はあいつも飛びこませてやる。」

彼の友だちは一枚の銅貨を巻煙草の箱の銀紙に包んだ。それから體を反らせたと思つと、精一ぱい銅貨を投げ飛ばした。銅貨はきらきら光りながら、風の高い浪の向うへ落ちた。するともう海女はその時にはまつ先に海へ飛びこんでゐた。信輔は未だにありありと口もとに残酷な微笑を浮べた彼の友だちを覚えてゐる。彼の友だちは人並み以上に語學の才能を具へてゐた。しかし又確かに人並み以上に鋭い犬齒をも具へてゐた。……………

*

この本文中に「或風の寒い四月の午後、高等學校の生徒だつた彼は彼等の一人」とあるが、龍之介の一高卒業は大正二（一九一三）年七月であるから、これは明治四四（一九一一）年か翌年の四月、若しくは卒業年の大正二（一九一三）年四月の間の出来事となる。私は龍之介の謂いから、このシチュエーションは正に明治の最後の江の島を活写していると読む。

そうして——

——そうして、この一首の朔太郎の短歌の存在によつて！

——その同じ稚児が淵の魚板石のロケーションのフレームの中に！

——後に盟友となる若き日の萩原朔太郎もまた！

——その恋人とともに写つてゐることが証明されたのである！……………

最後に。

私はこの一首を若き日に読んだ瞬間、

『…………この恋人が銀貨を投げた一刹那に「浪にかくれぬ黒き男」とは——朔太郎自身だな…………』

と独りごちたものだった。…………

そうして——

——そうして、私の臉に浮かんだ映像は

——かの

——つげ義春の

——「海辺の叙景」

——そのエンディングのコマだった…………

……朔太郎よ……彼女は確かに……君のファム・ファータルだったのだよ……」

逢はぬ夜はこほろぎさへも来て鳴くと
いふはいさゝか作りごとめく

(ある女の呼出しに答へて)

たんらんの蜘蛛が巣をはる手段より

尚にくむべき君がまなざし

「やぶちゃん注…「たんらん」「貪婪」で「貪婪」に同じい。」

心地よし長椅子の上に煙草のむ

歡樂の後の淡き倦怠

「やぶちゃん注…「倦怠」倦怠。「倦」はこの場合は「倦」に同じい。」

猶太びとエホバの御子を待つ如く
果敢なきかなやわがたのみごと

あゝ君は何の權威ぞ渴きたる

我に缺けたる酒盃を投ぐ

われきゝぬ今日も捕手の二三人

門を開けよと叩ける音を

前橋の共進會の裏門の
畑の中にきく秋の風

△

[九九二年一月号](#)の（主任田中尚氏の冒頭記事に（リンク先はPDFファイル。当時の会場の写真あり）、

《引用開始》

明治四十二（一九一〇）年九月七日から二カ月間、群馬県主催一府十四県連合共進会が前橋市で開催されました。共進会とは、産業の振興をはかるため参加府県が物産を陳列し、その成績を審査表彰するというもので、府県連合のかたちで全国的に行われていました。

会場は前橋市内二カ所に設けられ、第一会場の清王寺町（現県民会館）には、市が一万九〇〇坪の土地を提供して本館がおかれました。第二会場の連雀町（現本町一丁目）には参考館が建てられ、第二会場は馬匹畜産共進会が紅雲町（現前橋女子高校）で行なわれました。「やぶちゃん注…ここに写真の解説が入るが全文引用は気が引けるので中略とする。」
第一会場には、このほか蚕糸館、特許館、染織工芸館、雑工業業館などの陳列館が立ち並び、七万点を超す各種産物が陳列されました。また、飲食店や各府県の売店、余興地の活動写真、不思議館などの興行は多くの人々にぎわい、入場者は一三万人以上にのぼりました。

期間中前橋・渋川間には電車が開通し、市街地の家庭には電灯がともり、会場の建物は夜間イルミネーションに輝くなど、電気時代の幕開けのなか空前のにぎわいとなりました。

《引用終了》

とあり、これと考えて間違いあるまい。まさに朔太郎好みのイベントである。感じからはこの第一会場であろう。

なお、この一首の次行には、前の「きく秋の風」の「」位置に、標記のように『△』が配されて、この無題歌群の終了を示している。」

くもり日

死なん哉さらば生きん

すてばちの身をば柱になげかけて
忍びなきする此の頃のくせ

びすとるの口を額に押しあてゝ
そのつめたさに驚きて泣く

大方は死なでもあるか越し方は
みな一筋の灰色の途

「やぶちゃん注…底本校訂本文は「越し方」を「來し方」と『訂』する。従わない。」

空虚なるこの心をば充たすべき

何物もなし酒店に入る

居酒屋の樽に腰かけ焼酎を

飲み習はすもいたましき哉

「やぶちゃん注…「しやうちう」はママ。正しくは「せうちう」。」

「かきおき」を書きたることも五つ度の
上にのぼれど尚知死なであり

「やぶちゃん注…次の一首でも全く同様の「死」を抹消して「知」とする朔太郎自身による訂正があるが、「ソライロノハナ」ではこうした抹消訂正は極めて珍しい。」

たゞひとつ戀はれ戀してあることを
死知らで死ぬるが悲しさに泣く

△

コニヤクの強き心をもつ人に
此の女等はもの足らぬかな

異教徒の如くに我はもてなされ
酒肉の席を逃れ出でにき

「やぶちゃん注…原本は「異教徒」。誤字と断じて訂した。校訂本文も「異教徒」とする。」
わが心いやしくなりて株式の
話を父とするを悦ぶ

不敵にもかの王法わうぼうを破りたる
謀叛人をうつ銃の音

(逆賊は殺されたり、あゝ)

あそびや

鐘が鳴るあれは上野か浅草か
逢引の夜の月の出もよし

鼻唄が知らで過ぎたる角見世の
その「蘭蝶」に更くる色街

音羽屋とかけ聲なぐるその下に
やくざ男が拍子木をうつ

「やぶちゃん注」：「拍子木」は原本は「調子木」。校訂本文を採った。」

明烏夢の淡雪消ゆるより
果敢なき戀のくりごとを聞く

あそびやの離れ座敷の丸窓に
ひとゝもたれて見たる初雪



「やぶちゃん注」：「離れ座敷」は原本は「放れ座敷」。誤読の恐れがあるので校訂本文を採った。」

敗荷集

「やぶちゃん注…「敗荷」とは枯れ朽ちた蓮の意。これらは未注に示すように與謝野鉄幹の詩「敗荷」へのオードである。」

不忍池、長酩亭に我等が
壘みたる酒のつめたさよ

柳ちるまた鐘が鳴る不忍の
池をめぐりて秋は來りぬ

「やぶちゃん注…前書の「壘みたる酒」の「壘」を校訂本文は「酌」と『訂』する。採らない（この字は漢字として存在し、「くむ」と読める）。前書の「長酩亭」その他の詳細注は最後に附した。」

み手とればこゝにも秋の夕日落つ
亭をかこめる枯れ蓮のうへ

「やぶちゃん注…「枯れ蓮」は原本では「枯」の字は（「木」＋「固」）であるが、校訂本文に従い、訂した。」

欄により酒をふくめば盃の
底にも秋のうれひたゞよふ

「やぶちゃん注…この一首のみ先行発表作がある。朔太郎満二十四歳の時の、『スバル』第三年第三号（明治四四（一九〇三）年三月発行）に掲載された三首の内の一、

欄に寄り酒をふくめば盃の底にも秋の愁ただよふ
標記違いの相同歌である。」

悲しくも君に強いられ我が叫ぶ
挽歌の節に冷ゆるさかづき

「やぶちゃん注…「挽歌」は原本は「晩歌」。少々迷ったが、誤字と判断して、取り敢えずは校訂本文と同じく「挽歌」とした。」

鐘なれば敗荷に秋の夕日落つ

君寄り泣けばまた欄におつ

自墮落に弾く三味線も

盃の冷ゆるも悲し秋の水樓

絶えまなくむつごとするも涙おつ

かつは悲しき秋の日なれば

諧謔かいぎやくの別れ話も手をとれば

彼の涙おつ我が涙おつ



「やぶちゃん注：「長蛇亭」は「ちやうだてい（ちようだてい）」と読む。不忍の池の池の
弁天島（中之島）の南岸にあった酒店である。元尾張藩儒者であった文人鷺津毅堂（文政
八（一八二五）年～明治一五（一八八二）年）の事蹟を詳細に綴った彼の外孫であった永
井荷風の「下谷叢話」の「第三十九」の叙述中に以下のようにある（底本は国立国会図書
館「近代デジタルライブラリー」を視認した）。

*

……不忍池の周圍が埋立てられて競馬場となつたのは明治十八年である。されば此の時池
塘の風景は天保の頃梁川星巖が眺め賞したものと多く異なる所がなかつであらう。毅堂等諸
家の集り會した酒亭三河屋は辯才天を安置した嶋の南岸にあつた。維新以前には嶋の周圍
に酒亭が檐を接してゐたのであるが、維新の後悉く取拂はれて、獨三河屋のみが酒帘（れ
ん）を掲げることを許された。これは主人長太の妹お徳といふものが東京府に出仕する官
吏某の妾となつてゐた故であつたと云ふ。毅堂等の詩人は長太の酒亭を呼ぶに長蛇亭或は
長罌亭を以てした。わたくしの母の語る所を聞くに三河屋の妹徳は後に池の端に待合を出
した。また三河屋の娘お福は詩會の散じた折には彌海嶼と共に毅堂を送つて竹町の邸に來
たが、三河屋破産の後お福は三味線掘の小芝居柳盛座の中賣になつてゐたさうである。明
治三十二年の頃わたくしは三河屋のあつた所に岡田という座敷天麩羅の看板の掲げられ
てあるのを見た。その後明治四十四年の夏に至つて、わたくしはこゝに森鷗外先生と相會
して彌に荷花を觀たことを忘れ得ない。その時先生は曾て秋山に謁して贄を執らんことを
欲して拒絶せられたことを語られた。枕山が花園町に住してゐた時だと言はれたから其の
歿した年である。

*

この叙述から分かるように、これは亭主の名長太を振った屋号であり、しかも朔太郎がこの歌を詠んだ頃には、後掲する朔太郎の文に出るように、実は同位置に酒店はあったものの既に屋号は変わっていた。

即ち、これらの「敗荷集」歌群は、実は與謝野鉄幹二十八の時の作で詩集「紫」に載る、

敗荷 與謝野鐵幹

夕ゆふへしのはす不忍の池ゆく

涙おちざらむや

蓮折はすれて月うすき

長酩ちやうだてい亭酒寒し

似ず住の江のあづまや

夢とこしあまへ甘きに

とこしへと云ふか

わづかひと秋

花もろかりし

人もろかりし

おぼしまに倚りて

君伏目みしめがちに

嗚呼何とか云ひし

蓮はすに書ける歌

に基づくオードなのである（詩は以下に示す萩原朔太郎の「與謝野鐵幹論」の底本とした筑摩書房版萩原朔太郎全集の「引用詩文異同一覧」の原典を底本とした）。「詩の出版社 ミッドナイト・プレス」の公式ブログの「[敗荷 与謝野鉄幹](#)」によれば、これは明治三三（一九〇〇）年八月に大阪に旅した鉄幹が山川登美子・鳳晶子らと住之江の住吉大社に遊んだが、その「わづかひと秋」の後の日に、不忍池の長酩亭にて独り酒を酌みつつ、その時の

思い出を「花もろかりし／人もろかりし」と詠んだ追懐吟であったとある。

山川登美子は鉄幹を慕っていたが、明治三四（一九〇一）年に親の勧めに従って山川家に嫁いだ（翌年、夫と死別。なお、同年に鉄幹は晶子と結婚している）。その後も鉄幹は彼女を「白百合の君」と呼び、「新詩社」の晶子らとともに道を同じくしたが、明治四二（一九〇九）年に没した。

朔太郎は昭和一五（一九四〇）年二月号『文学界』に発表した「與謝野鐵幹論」（後に「帰郷者」に所収）で、この詩を『おそらく鐵幹の抒情詩中で、唯一の壓巻ともいふべき傑作である』と称揚して、全詩を掲げた上、以下のように評している（底本は筑摩版全集に拠る）。

*

前の「殘照」と共に、死んだ愛人に對する追懐の詩であるが、「敗荷」といふ題が示すやうに、逝きて返らぬ日への追懐と、永久に失はれた戀への傷心とが、落魄蕭條とした敗殘者の心境で歌はれてゐる。「夕べ不忍の池ゆく、涙おちざらむや、蓮折れて月うすき。」といふ冒頭から既に悲調であり、敗荷に晩秋の夕陽が落ちかかつてゐる、上野不忍池畔の景情をよく表してゐる。「長壽亭酒寒し」の長壽亭は、不忍池辯天堂の境内にある旗亭で、今は名が變つて別の屋號になつてゐるけれども、昔ながらの他に面して、欄干の周圍が蓮の葉に圍まれてゐる。詩の第四聯で再度此處を鮎出し、「おぼしまに倍りて、君伏目がちに、嗚呼とかいびし、蓮に書ける歌。」と結んだのは、過去にその京都の愛人と、同じ旗亭で戀を語つたことがあるのだらう。その追憶の旗亭に来て、敗荷に落つる夕陽を眺めながら、ひとり寒い酒を飲んでる詩人の心境を、落魄たる敗殘者の悲調で歌つてゐるこの詩の如きは、けだし鐵幹詩中の一傑作であるばかりでなく、明治新體詩中に於ても異例に秀れた戀愛詩の絶唱であらう。定評される如く、藤村は明治戀愛詩人の第一人者であるけれども、その戀愛リリズムの本質となしてゐるものは、旅愁に似た淡い漂泊者の愁ひであつて、かうした鐵幹の詩に見る如き、斷腸裂帛の悲調を帯びた戀愛詩とは、本質的に全く異つたものであることを知らねばならぬ。

*

と絶賛する（但し、最初の部分の「死んだ愛人」というのは事実としては誤りであるが……しかし……朔太郎にとつては失恋の相手とは押しなべて「死んだ愛人」であつたことも内的な真実であつたに違いない……）。因みに、これより前の部分で『漢詩獨特の悲壯なエスプリが、鐵幹に於て戀愛抒情の中に取り込まれ、星と董の感傷的な情緒の蔭で、新しい西歐詩風な變貌を示したことは、明治新體詩史上に於て充分特筆すべきことでなければならぬ。かうした鐵幹の秋風悲壯調は、次の詩に於て最も完璧に現れてゐる』として掲げられてある「殘照」（同「紫」所収）についても、鉄幹と朔太郎のために同底本から正統な詩形を引用しておく。

そぞろなりや
そぞろなりや

夕髪ゆふへかみみだる

地に霜あり

常住ちやうじゆうも何んの夢ぞ

人堪へんや

花堪へんや

嗚呼わりなし

水さびしげに竹をめぐり

痛手いたで負ふ子に似て

獨り秋を去いなんとす

山蓼やまたでの莖くきあらはに

黄ばむ日戸に弱し

人しのばざらんや

西の京の山

以上で注を終わる。」

さびしき町

溝板をもるゝ湯の香につゝまれて
逢曳したる夜のおもひで

「やぶちゃん注：「溝板」は原本では「構板」。暫く校訂本文に従う。」

みだらなる別府の町の三味線と
馬車のラツパと忘れぬ哉

煤けたる温泉宿の三階に
呆然として立つ男あり

煤黒き温泉宿の立ち竝ぶ
露地を出づれば冬の海みゆ

裏町の床屋が角に張られたる

芝居のびらに吹く秋の風

「やぶちゃん注…この一首は、朔太郎満二十六歳の時の、大正二（一九一三）年十月十一日附『上毛新聞』に「古き日の秋（昔うたへる歌）」という標題で「夢みるひと」名義により掲載された五首連作の巻首の一首、

裏街の床屋が角に張られたる芝居のびらに吹く秋の風
の標記違いの相同歌である。」

街角に廓がよひの四五人が
佇づみて聴く松前追分

「やぶちゃん注…「佇づみて」はママ。「松前追分」は「まつまへおひわけ（まつまえおいわけ）」と読む。辞書では江差追分に同じで、北海道の民謡で江差地方の座敷歌。信濃追分が越後から船乗りなどによって伝えられて変化したものというところがあるが、個人サイト「線翔庵」の「[松前追分](#)」によれば、北海道檜山郡松前町に伝わるそれは微妙に違ふとある。確かに『信州中山道と北国街道の分岐点「追分宿」（長野県北佐久郡軽井沢町）で、飯盛女達によって歌われた「追分節」が、全国に伝播したもの。その頃、『馬方節』に三下りの三味線の手がつけられたという意味の『馬方三下り』といった』とあるものの、全国に広がったそれは微妙に地域的变化を示しており、『「蝦夷や松前…」という歌詞から、『松前』（新潟あたりでは転訛して『松舞』なども…）という曲名に変化したものもある』るとし、『江差追分』として現在のような、前唄・本唄・後唄といったスタイルになる前の形の追分は、北海道を初めとして各地に残っています。その一つといえるのが『松前追分』で、『現在

はあまり聴くことは少ないですが、『江差追分』とも若干趣の違う節回しが魅力です』とはつきりと違いが示されてある。リンク先では「江差追分」の音源も聴ける。」

夕暮の町にたゞよふアルボース

足並はやき蕩子らのむれ

「やぶちゃん注：「蕩子」はママ。校訂本文は「蕩兒」とする。

「アルボース」ドイツ語：Arbos。辞書には親水溶性の薄黄色の固体で消毒剤として用いるとあるのだが、今一つ、正体が齷めない。そもそも私の持つドイツ語の辞書にはこの単語が載らない。但し、アルヴォ・ペルトがタルコフスキイに捧げた偏愛するアルバム「ARBOS」でラテン語の意味なら樹木であることは知っていた（羅和辞典を引くと他に檣・舵・船等の意もある。一方では古い海事用語であつたらしい）。翻つて、アルボース石鹼液というのがあり、実はこれ、我々が学校の手洗い場でお馴染みの、あの緑色の液体石鹼のことである。この短歌の「アルボース」の注としてはあの消毒薬みたような臭いを想起出来ればそれでよいのであろうが、私としては、あんなに見慣れた石鹼液なのに、孰れの辞書も「アルボース」なるものの原料を明記していないのが気になるのである。ラテン語から多分植物由来であろうことぐらいは分かるが、妖しい。アルボース石鹼の販売会社を調べると、消毒効果の主成分は添加するクロロキシレノール (chloroxylenol) と呼ばれるものであることが分かった（毒性その他はウイキの「クロロキシレノール」を参照。そこには強い魚毒性を有するとある。由来原料を記さないとところをみるとこれは化学合成物質らしい）。今時、ずっと我々が何の心配もせずに使い続けてきた謎の緑石鹼を問題にしないということはあるまいと検索すると、やはりあつた。C62氏のブログ記事「アルボース石鹼・・・大丈夫？」である。それによれば名前からの想像通り、アルボース石鹼は精製された植物油がベースらしい（それでも何の植物か分からない）。問題はやはり配合消毒成分クロロキシレノール及びエデト酸塩・緑色二〇一号・緑色二〇四号・黄色四号である。そこな書かれた数多くの副作用の危険性があるなど、これ、ゆめ知らず使っていた。蛇足ながら附けたしておく。」

格子戸のまへにたゞづみたそがれの
悲しき街を女みて居り

「やぶちゃん注：「たゞづみ」はママ。」

遠く居る君も忍べと夜なれば

涙流して尺八を吹く

裏街うらまちの暗き屋竝ぞ忘れぬ

博多少女のあはれなる唄



「やぶちゃん注…本歌群は二首目から別府温泉での囑目吟であることが知れ、底本の年譜で見ると、満二十一歳の明治四〇（一九〇七）年十二月の冬季休暇（当時は熊本五校第一部乙類英語文科一年で寄宿舎に入寮していた）に友人二人と十日程、別府温泉に遊んだとあるのがそれであろう。当該年譜には滞在中の『ある日、朔太郎がとつぜん笑い出し、何をしても止まらず、同行の二人が気が狂ったのではないかと思った。また、同郷を名乗る人に金を貸し、三人とも旅費が不足し、各自自宅へ三十圓ほど送金を依頼、春休みの歸省時にともに父親から叱責された』とある。

いつもと同じく、最後の一首の次行に、前の「あはれなる唄」の「れ」の左位置から下方に向って、以前に示した黒い二個の四角と長方形の特殊なバーが配されて、歌群の終了を示している。」

春のたはむれ

沈みゆくセロの響きに神経の
ふるふがごとき春の夕暮

行きづりの絆むすびばらが悪口わるぐちを
こわがる君とあねもねを買ふ

「やぶちゃん注…「行づり」「こわがる」はママ。「絆むすび」は原本では「纏」の字が「糸」でなく「糸」であるが、校訂本文を採った。」

たゞよへる祭の夜の灯の海に
我等は赤き帆をあげて行く

歌舞伎座のかへりに我をつゝみたる
床しきマントわすられぬひと

「やぶちゃん注…「歌舞伎座」は原本では「歌舞妓座」。以下に掲げる相同歌で訂した。この一首は、朔太郎満二十六歳の時の、大正二（一九一三）年十月十一日附『上毛新聞』に「夢みるひと」名義で掲載された五首連作の一首、

歌舞伎座のかへりに我をつつみたる床しきマント忘られぬひと
の標記違いの相同歌である。】

オオロンの小夜曲ともきゝ居りぬ

世にも悲しき訴へごとを

あやうくもこと定まりし別れ路を
またかゝること言ひて泣かせ給ふか

「やぶちゃん注…「あやうく」はママ。】

荒み樽心のこのごろ君をえて

夜も日もわかず消息を書く

「許せ」「否輕き眩暈す」かの夜の

暖爐はげにもあつすぎしかな

「やぶちゃん注…「眩暈」の「暈」は原本では「曇」。誤字と断じて訂した。改訂本文も「眩暈」とする。そのルビ「めまい」はママ。改訂本文は「暖爐」を「煖爐」とするが、従わない。】

若き身のわれが奏するマンドリン
ちゝろちゝろと泣くが哀しき

キュラソオの淡きにほひの漂へる
くちびるをもて吸はれけるかな

「やぶちゃん注」：「キュラソオ」フランス語「curacao」。キュラソー。リキュールの一種。オレンジの果皮から香気をラム酒やブランデーに浸出させた甘い洋酒。カクテルに用いる。元来はのキュラソー島（カリブ海南部ベネズエラ沖にあるオランダ自治領）産のオレンジを用いたことに由来する。」

寢室の窓のガラスに息かけて
君が名をかく雪どけの朝



秋より冬へ

ニツケルのしやぼんの箱にゆがみたる
顔のうつるも悲し初秋

ニコライの尼が僧衣のま白なる
カフスのうへにたゞよへる秋

「やぶちゃん注」：「ニコライ」現在、群馬県前橋市千代田町にある前橋ハリストス正教会聖使徒大主教聖ニコライ聖堂か（同教会公式サイトは[こちら](#)）。

いへばえに君がくちびるほのかにも
秋の憂の來りゞよふ

「やぶちゃん注」：原本は以下の通り。

いへばへの君がくちびるほのかにも
秋の憂の來りゞよふ

しかしこれでは意味がよく通らない。これは恐らく古語の「言へば得えに」の誤りと思われる。に」は打消しの助動詞「ず」の連用形の古形で、「口に出して言おうとするが、そう

するとしかし、うまく言うことが出来ない」の意である。校訂本文もそう採って「いへばえに」と訂する。」

夜をこめてまどろみもせむあかつきの
白熱燈の消ゆる侘しさ

「やぶちゃん注：「侘しさ」の「侘」は原本では「侘」。誤字と断じて訂した。校訂本文も「侘しさ」とする。」

かぎりなく一直線につゞきたる
街を盡くれば白き冬海みゆ

「やぶちゃん注：「冬」は抹消。」

ほのかにも瓦斯のほひの漂へる
勸工場のくらき敷石

「やぶちゃん注：原本は「観工場」。誤字と断じて訂した。校訂本文も「勸工場」。この一首は、朔太郎満二十六歳の時、大正二（一九一三）年十月十一日附『上毛新聞』に「夢みるひと」名義で掲載された五首連作の三首目、

ほのかにも瓦斯がすのほひのただよへる勸工場くわんこうぜうの暗き鋪石くろしきいし

の標記違いの相同歌と判断する。この「くわんこうぜう」はママ。底本全集校訂本文では「くわんこうば」と訂するが従わない。誤りとしても朔太郎が音韻上、これで詠んだ可能性を排除出来ないからである。無論、「勸工場」は正しくは「くわんこうば」が正しい読みではある。老婆心ながら再注しておく、勸工場かんこうばとは明治・大正期に一つの建物の中に多くの店が入って種々の商品を陳列・即売した一種のマーケットのことで、明治一（一八七八）年一月に政府の殖産興業政策の方針に沿って東京府が澁馬河の口（現在の千代田区内）に常設商品陳列場としての「東京府勸工場」を開設したことに始まる（ここには前年に東京上野公園で開催された第一回内国勸業博覧会に展示された出品物も移されて陳列された。当時の出品点数は合計三十五万点、入場者合計五千二百人に及んだとされる）。後には本格的なデパートの進出により衰退した。勸商場。」

こゝろよき朝飯あさげの後のストーブに

林檎を焼けば淡雪のふる

「やぶちゃん注…校訂本文は「朝飯」を「朝餈」と『訂』する。採らない。」

吉原のおはぐる溝のほのぐらき
中にひかれる櫛の片われ

「やぶちゃん注…「おはぐる溝」は原本では「おはぐる構」。誤字と断じて訂した。校訂本文も「おはぐる溝」とする。この一首は二首前と同じく朔太郎満二十六歳の時、大正二（一九一三）年十月十一日附『上毛新聞』に「夢みるひと」名義で掲載された五首連作の二首目、

吉原よしはらのおはぐる溝どぶのほの暗くらき中なかに光ひかれる櫛くしの片割かたわれ

の標記違いの相同歌である。」

あはれなる落葉の上の戀がたり
み膝のうへの夕時雨かな

藤村のふるき詩集のあひだより
あせし葦の落ちし悲しさ

ほのかにも木立の影に煙草の灯
白きベンチのひかる夕暮

「やぶちゃん注…校訂本文では「煙草の灯」を「煙草の火」と『訂』する。採らない。」

赤城山鹿の子まだらに雪ふれば
故郷びとも門松をたつ

□

「やぶちゃん注…この一首は朔太郎満二十四歳の時、『スバル』第三年第三号（明治四四）一九〇三（一九一三）年三月発行）に「萩原咲三」名義で掲載された（「咲三」の誤りで校正漏れか誤植）三首の二首目、

赤城山鹿の子まだらに雪ふれば故郷びとも門松を立つ
の標記違いの相同歌である。」

前席の瓢六玉がしなり出て
また活惣を踊る夜長さ

「やぶちゃん注…敢えて原本のままを出すこととする（私は原本を初めて読んだ際、唯一、一読、読みも意味も分からなかった短歌だったからである）。校訂本文は、

前席の表六玉がしなり出て
また活惣を踊る夜長さ

と訂する。「瓢六玉」は間抜けな愚か者のことを指す「表六玉」「兵六玉」で「へうろくだま／ひやうろくだま（ひょうろくだま）」。因みにこの語源は亀に纏わる「賢い亀は六を隠し、愚かな亀は六を表す」という伝承に基づく。亀は甲羅から頭・尻尾・四肢の計六箇所が生体可動部を持つが、ここは亀にとつて攻撃を受けた場合、生死に関わる箇所でもあり、通常の亀は危険を感じるとこれらの部分を素早く甲羅の中に隠す。ところが愚鈍な亀はこの六つの箇所を表に出したままにしているとという意味に基づく（「玉」は接尾語でやや嘲りの意を含んで人をその程度の人物であると決めつける語）。「活惣」は「かつぽれ（かつぽれ）」と読む。幕末から明治にかけて流行した俗謡と踊りで、鳥羽節から願人坊主の住吉踊りに取り入れられて大道芸となり、豊年斎梅坊主らによってお座敷芸となった。名は「かつぽれ、かつぽれ、甘茶でかつぽれ」でというその囃子詞から。」

悪玉のたくらみごとが長かりし

場末の寄亭よせのかんてらの色

（以上二首寄亭にて）

「やぶちゃん注…校訂本文は短歌と後書の「寄亭」を「寄席」に訂する。」

長き夜の浪のみ船の楫音の
よくきこゆれば怪しみてきく

「やぶちゃん注…「楫音」の「楫」は原本では「搦音」。この「搦」は音「ユウ・シユウ」

で、訓は「ゆずる」「へりくだる」「あつまる」、敬意を表わすために両手を胸の前に組んで囲みをつくった形にすることを意味する漢字であり、明らかな誤字と断じて訂した。校訂本文も「楯」とする。」

冬の来る頃

涙して火鉢の炭をふくことも
若き我れには痛ましきかな

うなだれて街を歩けばおまはりも
鬚をひねりて我を見送る

しもやけのうすら痒きがうら悲し
母に無心の手紙かくとき

人混みの中を歩くも歸りきて
寢床に入るもすべて悲しき

何物か我まつ如く思はれて
追はるゝ如く町をさまよふ

かなしみて家にかへればありしごと
我を迎ふるにくき小机

「やぶちゃん注…「迎ふる」の「迎」の字は原本では「迴」の「回」を「向」にしたもの。読めないので、校訂本文を採用した。」

妻もたぬ身には慰さむ人もなし
柱によりて忍び泣きする

「やぶちゃん注…「慰さむ」はママ。」

行きづりし中學生の四五人が
われを見返り物言ひてすぐ

「やぶちゃん注：「行きづり」はママ。」

街行けばあれは酒飲み度しがたき
のらくらものと行人の見る

おまはりを相手にくだを巻きて居る
酔ひどれの兵士が懐かしき哉

酒を呑む癖がつきてより錢もたぬ
日には臥床をひき被ぎ寝る

學校を休みしほどの楽しさと
またそこばくの投げやりとあり

何ごとか一人ごととして歩るきしを
途行く人の怪しみて見る

「やぶちゃん注：「歩るきしを」はママ。」

あることが可笑しくなりて何うしても
笑ひがやまず電車の中にて

思ひ出せぬ顔をやうやく思ひ出しぬ
それがつまらぬ人なりし悲しさ

酒場の一隅より

薄暗き酒場の隅にあるひとが
我に教へし道ならぬこと

「やぶちゃん注：これは朔太郎満二十四歳の時、『スバル』第三年第四号（明治四四（一九〇三）年四月発行）に「萩原咲二」名義で掲載された一首、薄暗き酒場の隅に在るひとが我に教へし道ならぬ道

の標記違いの相同歌である。」

賭奕ばくちはも如何に楽しきその錢を
持ちて女を買ふは尚よき

「やぶちゃん注：「賭奕」はママ。」

くどくどと佛頂面にかのやから
何ごとを説く春の灯のまへ

あることを知らで言ひしが不覺にも
わが一生のあやまちとなる

もるひねを計はかりあたへよびすとるを
のんどにあてよたれかとくせよ

あゝ遂に今日も死にえずびすとるを
ふところにして酒店に入る

學校を追はれし我がさかしげに
世を罵れば親はまた泣く

悲しきは生をしたへる執心が
また一方に死を願ふこと

我をよく誰れか如何にととかせよ殺すとか
あるひは活かすとかいづれにかせよ

「やぶちゃん注：「あるひは」はママ。」

人竝に可笑しきことも言ひ居れば
誰れか知るらん死を願ふ子と

酒を飲むその時の外の我を見れば
生きてあるごとし死にてあるごとし

酔ひどれの臭き息をば酒のままぬ
ときに嗅ぐより悲しきはなし

新しき我等が軍の尖兵の
中にまぢれる鼓手の少年

「やぶちゃん注…「まぢれる」はママ。「鼓手」は「こしゆ（こしゆ）」で軍隊の戦列兵の鼓手。「鼓」は「鼓」の異体字。筑摩版全集校訂本文は「鼓」に訂する。」

たゞ人は物言ふおきもうつむける
少年とのみ我を見るらむ

わがまへに人いくたりかつまづきし
かの途を行きこの途をゆく

僅かなる在府の錢を思ひつゝ
酒場を出でゝ風に吹かるゝ

その心ダイナマイトに似たれども
弱々しげに見ゆる少年

事ごとに心跳りてときめきし
十七の春とらふ由なし

その頃の十七才の少年と
われを思へる祖父おぢのいましめ

「やぶちゃん注…筑摩版全集校訂本文は「才」を「歳」に訂する。」

何時となく覚えしものを罪てふか
かくれてあそび酒を飲むこと

待ちあひ
待合の勘定書と質札と

白銅とのみ残れる財布

「やぶちゃん注…「白銅」白銅貨。当時流通していたのは菊を刻印した五銭白銅貨幣と後発の同じく稲を刻印した五銭白銅貨幣。」

その朝の痛める心はらちもなく
また来よといふ人を憎みぬ

宵ごとの父の小言を時ありて
きかざることを悲しみとする

放蕩の報ひというふに餘りにも
あきらめられぬことがあるかな

「やぶちゃん注…「報ひ」はママ。」

いかでわれ罪を悔いんや悲しきは
矛盾といへる鬼のすること

「やぶちゃん注…「矛盾」は原本では「矛盾」。誤字と断じて訂した。」

生じいに神のこゝろを量りたる
その天罰がわれを苦しむ

「やぶちゃん注…「生じい」「はママ。」

新宿のレストランのよごれたる
紺簾をくぐる夜のならばし

「やぶちゃん注…「紺簾」はママ。校訂本文は「暖簾」に訂する。恐らくはこの校訂は九分九厘正しいであろうが、私には朔太郎の眼に「紺の暖簾」が現前としてあったのだと思われ、これを容易に誤字として訂することが出来ないのである。」

なんとなく若き女とつれだちて
浅草などへ行きたくなりぬ

一人にて梅見に行きしがそのことが
悲しくなりて逃げてかへりぬ

わが隠袋かくしかの色文とピストルと

争ひつゝも七日共棲む

「やぶちゃん注…「隠袋」は原本は「隠衣」。誤字と断じて、校訂本文と同じく「隠袋」とした。」

きちがひになりたくなりて爪屑を
火鉢にくべて見て居たるかな

「やぶちゃん注…爪を焼く香りは火葬場の臭いとはよくいう（当然である）が、個人サイト「鯉乃國の万談義」のこちらの「おぢやん おばやんの言い伝え」の記事の中に土佐では「爪を燃やすと貧乏になる」「爪を燃やすと気がふれる」ともいうらしい。」

わがために二ニンが五たるそのこと
ある日を思ひ生くる愚かさ

「やぶちゃん注…「思ひ生くる愚かさ」は原本は「思ひ生ぐる愚かさ」。孰れも誤字と断じて校訂本文を採った。」

横町のぼんくら安も人並み
我を説かんと日をおきて来る

我が髪をわれとむしれる習慣ならはじの
久しくなれば櫛も通らず

「やぶちゃん注…私ことながら、この一首、タイプしながら、私が小学校三年生の頃、一時、眉毛を引き巻る神経症的な癖が起こり、遂に右眉が半分位なくなってしまう、母が眉描きで描いて呉れたのを思い出した。」

EGOIST われも酒場によこたはり
將某に負けしことを悲しむ

「やぶちゃん注：「將某」の「某」は「棋」の異体字。」

新思想と國體

新しき此の國の人犬のごと

口籠せられて生くるはかなさくちし

わが酒場かの黨員と日毎きて
カルタきるより樂しきはなし



あさくさ

暖秋小春日の午後

淺草公園の雜鬧を歩く時

ほど心たのしきものはあらぢ

やるせなき心抱きて淺草に
來れる我も玉乗りを見る

「やぶちゃん注：前書の「あらぢ」はママ。前書中の「雜鬧」は「ぎつたふ(ぎつとう)」「と読み、「雑踏」「雑沓」に同じい。「鬧」は本来は音は「ダウ(ドウ)」で騒ぐ・騒がしくする・騒がしい・賑やかという意である。」

南無大悲大慈大悲の觀世音
わが思ふこととゞかせ給へ

何時までも觀音堂の廻廊に
柳散るを眺めて居たりき

かの巡查いつも立ちて居り境内の

手洗鉢みたらしの屋根の柳散るころ

柳散る観音堂のきざはしに

不門品ふもんぼんを誦して居たる男よ

「やぶちゃん注：「不門品」のルビは原本では「ふもんぼん」。誤字と断じて訂した。無論、校訂本文もそう訂する。」

浅草の十二いろはの三階の

色硝子より見たる町の灯

われ母の影にかくれて餌をやりし

その鳩を思ひ浅草に行く

やる瀬なき心抱きて浅草に

來れる我も玉乗りを見る

「やぶちゃん注：ママ。本歌群「あさくさ」の冒頭の一首の重出。」

あはれかの浅草の人と物音の

中を歩くも心痛めり

公園のベンチに來りモスリンの

灯の見ゆるまで座りて居たりき

「やぶちゃん注：「モスリン」（英語：muslin）は綿や羊毛などの単糸で平織りした薄地の織物。[ウィキの「モスリン」](#)によれば『日本では、モスリンは薄手の平織り羊毛生地を指すのが普通で、綿生地を綿モスリン、羊毛生地を本モスリンと呼んで区別することがある。』『別名、メリンス（スペイン語に由来）、唐縮緬（とうちりめん）。』『絹のモスリンはシフォンと呼ばれる。』『薄地で柔らかくあたたかいウール衣料素材で、日本では戦前の普段着の着物、冬物の襦袢、半纏の表、軍服（夏服・夏衣）などに用いられていたが、近年では東北地方北海道の一部以外ではほとんど流通しておらず、目にする機会は少なくなっている』とある。ここは最後が直接体験過去の「き」であるから、「モスリン」を着た人物の換

喩であるが、これは朔太郎自身であろう。なお、校訂本文は「座」を「坐」と訂する。」

一人にて酒をのみ居れる憐れなる
となりの男なにを思ふらん

(神谷バアにて)

浅草の活動寫眞の人ごみの
中にまぢりて一人かなしむ

はらからもわが浅草に行くことの
深きころを知らぬかなしさ

その日頃

わが少女捕虜ヒリックのごとくくゝられて

鞭もて打たれ泣きたしといふ

西洋の花なる故にダリヤの花
を好みたる人、その人いまい
づれにありや

眠むたげに尚キスせんと言ふ人の
側へにありて午後の茶を飲む

古めきし我が洋館のバルコニに
晝も夢みる人と住みにき

かあてんも動かずなりし八月の
午後を我等はキスして居たりき

窓あけよ餘り我等が長き日に
空気も今は重くしづめり



うすら日

うすら日はやゝ来て這へる露臺など
紅き花など咲けるこのごろ

「やぶちゃん注…「うすら日」の標題の裏に一首のみ配されたもの。因みに筑摩書房版「萩原朔太郎全集」第十五卷（昭和五三（一九七八）年刊）の校訂本文では「やや来て」となっているが、この新字体「来」は明らかに誤植である。」

ひとづま

なにごとも花あかしやの木影にて
きみ待つ春の夜にしくはなし

「やぶちゃん注…本歌は、朔太郎満二十六歳の時、『朱欒』第三巻第四号（大正二（一九一三）年四月発行）に載った、
なにごとも花あかしやの木影にて君まつ春の夜にしくはなし
の標記違いの相同歌である。」

あいらすのにほひぶくろの身にしみて
忘れかねたる夜をあひぶき

「やぶちゃん注…本歌は、朔太郎満二十六歳の時、大正二（一九一三）年十月二日附『上毛新聞』に載った、

あいらすのにほひぶくろの身にしみて忘れかねたる夜をあひぶき
の標記違いの相同歌である。」

夏くれば君が矢ぐるまみづいろの
浴衣の肩にほふにひづき

「やぶちゃん注…本歌は同じく朔太郎満二十六歳の時、大正二（一九一三）年十月二日附『上毛新聞』に載った、

夏なつくれば君きみが矢車やぐるまみづいろの浴衣ゆかたの肩かたにほふ新月にひづき
の標記違いの相同歌である。」

しなだれてはにかみぐさも物はいへ
このもかのも逢曳あひだのそら

「やぶちゃん注…前歌と同じ初出の、

しなだれてはにかみぐさも物ものは言いへこのもかものあひぐさのそら
の標記違いの相同歌である。」

おん肩へ月は傾むき煙草の灯
ひかれる途のほたるぐさ哉

「やぶちゃん注…底本校訂本文では「傾むき」を「傾き」に、「灯」を「火」と『訂』する。
採らない。特に後者は明らかな捏造である。」

なにを蒔く姫ひぐるまの種をまく
君を思へと涙してまく

「やぶちゃん注…本歌は、朔太郎満二十六歳の時、『朱戀』第三巻第四号（大正二（一九一三）年四月発行）に載った、

なにを蒔くひめひぐるまの種を蒔く君を思へと涙してまく
の標記違いの相同歌である。」

あひぐさの絶間ひさしき此の頃を
かたばみぐさのうちよりて泣く

うち侘びてはこべをつむも淡雪の
消けなまく人を思ふものゆへ

「やぶちゃん注…「ゆへ」はママ。朔太郎満二十六歳の時、『朱戀』第三巻第四号（大正二

(一九一三)年四月発行)に載った、
うちわびてはこべを摘むも淡雪の消なまく人を思ふものゆゑ
の標記違いの相同歌である。」

かくばかりひとづま思ひ遠方の
きやべつの畑の香にしみてなく

いかばかり芥子の花びら指さきに
しみて光るがさびしかるらむ

「やぶちゃん注…「芥子」は原本では「艾」(よもぎ)の右払いの左の起筆箇所^に左下向き
の点が入った字体。後掲する先行する歌形に従い、「芥子」と訂した。本歌は朔太郎満二十
六歳の時、大正二(一九一三)年十月二日附『上毛新聞』に載った、

いかばかり芥子^{けし}の花びら^{はな}指さき^{ゆび}に泌^しみて光る^{ひか}がさびしかるらむ
の標記違いの相同歌である。」

はつはる

ぎたあるのあの糸の切れしをつぐ如し
しづかにくるゝ春のゆうべは

「やぶちゃん注…「ゆうべ」はママ。」

ほのかにもケレオソートの^にほひして
はつはるの日はくれて行くかな

「やぶちゃん注…「ケレオソート」クレオソート。ブナなどの木タールから得られる無色又
は黄色がかった油状の液体で、グアヤコールなど種々のフェノール類の混合物。刺激臭が
あり、防腐薬・鎮痛薬などに用いる。現在の正式呼称は木クレオソート^{もく}。所謂、正露丸の
臭いである。」

春あさき若草山のふもとにて
しづこゝろなく吸ふ煙草かな

すつぽんと花火の玉の破れしとき
さくらさくらはあめいろに咲く

薄葉すすやうに口紅すこしにぢむほど
月の出よしやくちづけのあと

「やぶちゃん注：「すすよう」のルビ及び「にぢむ」はママ。「薄葉」は「薄様（様）」とも書き、読みは「うすえふ（うすよう）」が正しい。薄手の鳥の子紙・雁皮紙又は一般に薄手の和紙を指す。」

思ふどち語りつかれて息らへる

藤椅子とういすの影の青きくちなし

「やぶちゃん注：「藤椅子」はママ（「籐椅子」が正しい）。ルビもママで、萩原朔太郎は詩篇「[交歓記誌](#)」（大正三（一九一四）年七月号『創作』。リンク先はこの注のために急遽作った私の電子テキスト）でも「藤椅子」と書き、しかも「といす」とルビを振っているから、朔太郎は普段も「籐椅子」を「藤椅子」と書き、しかも「といす」と発音していたと考えてよく、これは朔太郎にしばしば見られる一種の確信犯的誤用であるからママとした。」
なにかしてうき身をきつくし死ぬばかり
ひと戀ふすべをおぼへたきかな

「やぶちゃん注：「おぼへ」はママ。」

ふきあげのみづのこぼれをいのちにて
そよぎて咲けるひやしんすかな

「やぶちゃん注：朔太郎満二十六歳の時、『朱戀』第三卷第五号（大正二（一九一三）年五月発行）に掲載された、

ふきあげの水のこぼれを命にてそよぎて咲けるひやしんすの花
の標記違いの相同歌である。」

きのふ心ひとつに咲くばかり
るべりやばかり悲しきはなし

「やぶちゃん注：「るべりや」キキョウ目キキョウ科ミジカクシ（溝隠）属 *Lobelia* の ロベリア・エリヌス *Lobelia erinus*、和名ルリチョウソウ（瑠璃蝶草）及びその園芸品種。歌群「るべりや」他で既注。本歌は前と同じ『朱鸞』に掲載された、

きのふけふ心ひとつに咲くばかりるべりやばかりかなしきはなし
の標記違いの相同歌である。]

たち別れひとつひとつに葉柳の
しづくに濡れて行く俣かな

「やぶちゃん注：本歌も前と同じ『朱鸞』に掲載された、
たちわかれひとつひとつに葉柳のしづくに濡れて行く俣かな
の標記違いの相同歌である。]

しのゝめのまだきに起きて人妻と
齧母の窓より見たるひるがほ

「やぶちゃん注：底本では「齧母」の「齧」は（「米」＋「氣」）であるが表示出来ないし、意味は明らかに汽車であるから、かく訂した。因みに校訂本文は「汽車」としている。「齧」は「汽」の異体字である。以前から申し上げている通り、意味に変化がなく、誤用でないにも拘らず、異体字まで『校訂』してしまっている底本にはやや疑義がある。何故なら異体字を総て正字化する根拠とその徹底可能性には明らかに限界があるからであり、それが絶対の定本とされること自体に疑問を持つからである。本歌は、前と同じ『朱鸞』所収の、
しのめのまだきに起きて人妻と汽車の窓より見たるひるがほ
の標記違いの相同歌である。]

ちりほこり散らばふ黄なる木の葉など
むしろのうへの名所繪圖など

あさはかの女ごゝろにちらちらと
酒のこぼれて嘆く夜かな



けふのうた

すさみたる女の顔の白粉か
酒に酔ひたるのちのこゝろか

われは尚生きて居たりき氣まぐれに
折から歌を詠みいでしため

むくむくと煙たちのぼり玉手箱
わがたのめごと消えはてにけり

「やぶちゃん注…原本では上句が「むくむくと煙たりのぼり玉手箱」であるが、意味が取れない。校訂本文を採る。」

一となげよ兔にも角にもすてばちの

このさいころを轉がしてみよ

こゝろ惱ましく狂ほし

とんがらしくるりくるりとめぐる日は
眼にいたいたし泣け泣け咲二

「やぶちゃん注…前書は原本は「こゝろ惱ましく狂ほし」。誤字と断じて訂した。校訂本文も「惱」とする。「くるりくるり」及び「いたいたし」の「いたいた」の後半は原本では踊り字「へ」。この踊り字使用は「ソライロノハナ」の中で特異点で、しかも同一歌の中に二箇所使われている点でもこれは確信犯で、この時の朔太郎にとってはこのスラーのような踊り字が、「こゝろ惱ましく狂ほし」の内在律を示すための音楽記号のようなものでもあったのかも知れない。「咲二」は萩原朔太郎が二十二〜二十六歳頃に盛んに作歌していた頃の雅号。」

かへろかへろ山しよ太夫の赤面か
やんまとんぼか飛べ飛べきちがひ

きちがひのうすら笑ひに茜さし

いなごの如く鳳仙花とぶ

ひとゝこを見つめて居れよ日は照れよ
くるりくるりとめぐれひぐるま



ソライロノハナ

萩原朔太郎

附やぶちゃん注
了